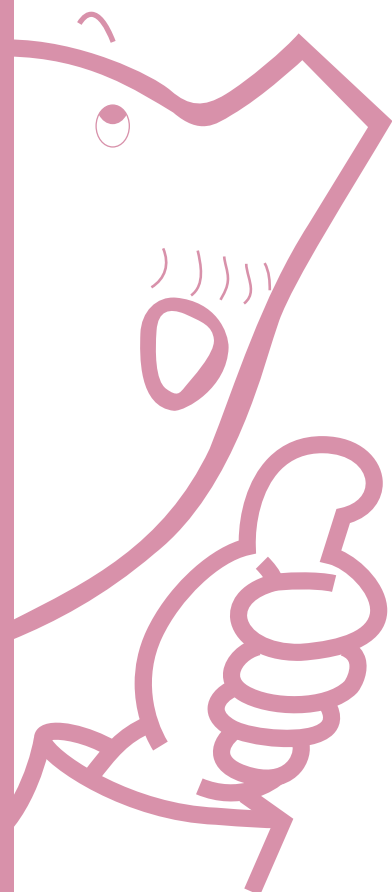


「第1回ランチタイムFD」の実践記録

2005・09

名古屋大学高等教育研究センター



特色GPシリーズ2

「第1回ランチタイムFD」の実践記録

2005.09

名古屋大学高等教育研究センター

特色GPシリーズの刊行にあたって

名古屋大学高等教育研究センターは、1998年4月の創設以来、高等教育の質的向上を目指した研究・開発を行うとともに、その成果を、名古屋大学内にとどまらず、他大学・他センターをはじめとする学外諸機関に対しても積極的に公表してきました。幸い、その多くは、みなさまから広範な支持をいただくことができました。

こうした活動が評価され、2004年度には、文部科学省が推進する「特色ある大学教育支援プログラム」(特色GP)に、当センターが中心となって名古屋大学全体で取り組みを進めてきた「教員の自発的な授業改善の促進・支援 - 授業支援ツールを活用した授業デザイン力の形成」が採択されました。この取り組みは、教員が自ら進んで授業を改善する活動を促進することを目的としたものであり、授業改善の方法論の開発、そして具体的な実践手段の提供を通じて、授業改善に必要不可欠のスキルである「授業デザイン力」を、個々の教員が自分に適したやり方で身につけることを支援しようとするものです。特色GPでは、これまでの取り組みの内容をさらに充実させるとともに、その成果を学内外に広く普及させることが課題です。当センターは、こうした課題を遂行するために、新たなプロジェクトを立ち上げました。これは、オンライン・ティーチングティップスである『成長するティップス先生』と、ウェブ上でシラバス作成を支援するツールである『ゴーイングシラバス』のさらなる充実・展開を中心に据え、さらに、これらに関連する試みとして、学生の学習支援のための「スタディティップス」の研究・開発、またこれらのツールを生かした新たなFDプログラムの研究・開発までも射程に含めるプロジェクトです。

当センターは、高等教育の現場で生じる諸課題に即応しうる研究・開発を目指してきました。したがって、本プロジェクトの最終的な成果の多くもまた、研修プログラム・サービス・ツールといった形で提供されることとなります。しかしながら、こうした最終成果に至る過程で積み上げられた研究や作業それ自体にも、他の研究活動やプロジェクトへとつながる知見・示唆が少なからず含まれるものと考えられます。こうした点を踏まえて、われわれは、開発の最終成果のみならずそのプロセスをもこれまで以上に積極的に学内外に公表すべく、ここに「特色GPシリーズ」を新たに刊行することにいたしました。

本シリーズを通じて、高等教育研究者をはじめ、授業改善に日々取り組んでおられる教育関係者、さらには高等教育に関心をお持ちの方など、広範な方々に当センターの情報を提供していく予定です。みなさまからのご意見・ご批判を頂戴し、今後の研究開発活動やその成果のいっそうの改善に役立てていきたいと考えております。どうかご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

2005年4月

高等教育研究センター長
戸田山 和久

はじめに

戸田山 和久

いまやどの大学でもFD、つまり「ファカルティ・ディベロプメント」の花盛りです。有名講師を招いての講演会・勉強会もあれば、教員を貸し切りバスで山奥の保養施設に拉致監禁して行われるFD合宿もあり、さまざまな形態で「FD活動」が繰り広げられています。われわれセンターのスタッフも、こうしたFD活動の講師として招かれることもしばしばです。もちろん、このような啓発活動は重要だし、一定の効果もあるでしょう。

でも、ちょっと待てよ。ひねくれ者の多い、われわれ名古屋大学高等教育研究センターは立ち止まって考えるわけです。ファカルティというのは、集合名詞じゃないの？「教授陣」とか「教員集団」のコトだよ。そのディベロプメントってことは、個々の教員がそれぞれ教授技術を磨いて授業改善に励むってだけじゃなくて、教授陣が一つの集団として力をつけることが含まれるんじゃないのかな。

つまり、こういうことです。教員が互いの授業のことに無関心であるようなファカルティ、互いの授業のことに語り合うことがタブーになっているファカルティよりも、教員同士が授業の悩みについて語り合い、ときには授業を互いに見せ合ったり、あるいは協力して教材をつくったり、ノウハウを交換したりできるファカルティの方が、「力を持っている」。FDの本当の目的は、教員が分野や部局の壁を越えて、授業についてフランクに語り合い、お互いに切磋琢磨できるような、コミュニティあるいは精神風土づくりにあるんじゃないでしょうか。

「ランチタイムFD」は単に低負担・低予算の「プチFD」、つまりFD界のリストラを目指したものではなく、昼ご飯を食べながら気軽に授業のことを語り合う開かれたコミュニティづくりの第一歩でもあるのです。ランチタイムFDのプロジェクトを通したセンターの最も重要な役割は、そうした教員コミュニティの種を蒔くことにありました。というわけで、けっこう志が高いのであります。とは言うものの、はじめての試みはいろいろ試行錯誤の連続ではありました。その経過をまとめてみましたので、忌憚ないご批判・ご意見を賜りたく思います。

研究組織

(2005年9月1日現在)

企画会議

戸田山 和久 名古屋大学 高等教育研究センター センター長
夏目 達也 名古屋大学 高等教育研究センター 教授
栗本 英和 名古屋大学 高等教育研究センター 助教授
近田 政博 名古屋大学 高等教育研究センター 助教授
中井 俊樹 名古屋大学 高等教育研究センター 助教授
中島 英博 名古屋大学 高等教育研究センター 助手
青山 佳代 名古屋大学 高等教育研究センター 助手
井上 和美 名古屋大学 高等教育研究センター 専門職員

プロジェクトメンバー

戸田山 和久
夏目 達也
近田 政博
中井 俊樹
中島 英博
青山 佳代

報告書執筆者

戸田山 和久
夏目 達也
近田 政博 (編集幹事)
中井 俊樹
中島 英博
青山 佳代 (編集幹事)

目 次

ランチタイムFDの趣旨と概要

- 1 ランチタイムFD 第1日目
「なぜ授業改善が求められているのか？」夏目 達也

- 2 ランチタイムFD 第2日目
「学生がより学ぶための授業の方法」中井 俊樹

- 3 ランチタイムFD 第3日目
「学生の学習を支援するシラバスを作ろう」中島 英博

- 4 ランチタイムFD 第4日目
「学生は何を求めているか？」近田 政博

- 5 アンケート集計と総括青山 佳代
近田 政博

【資料】

資料1 ランチタイムFDで使用したスライド

資料2 ランチタイムFDの広報

資料3 ランチタイムFD参加者へのアンケート用紙

資料4 ランチタイムFDの様子(写真)

ランチタイムFDの趣旨と概要

1. ランチタイムFDの趣旨

ランチタイムFDは、授業改善を目的とした新しいタイプのFD（ここでは教育・授業に関する研修の意味で用いる）として、平成17年度から名古屋大学高等教育研究センターが始めた試みである。このFDでは、名古屋大学での教育経験の少ない新任教員や若手教員を主たるターゲットにしている。また、教育経験は豊富であるが、学生への対応などに悩んでいる教員や、将来大学教員職を目指している大学院生も対象としている。

本プログラムのねらいは、普段はなかなか出会うことの少ない専門領域の異なる教員同士が知り合い、リラックスした雰囲気の中で昼食を取りながらFDに参加してもらうことによって、授業に関して本音で語り合えるコミュニティを形成することである。同時に、当研究センターの活動内容の紹介も行うこととしている。

2. ランチタイムFDの概要

このランチタイムFDでは、日頃、教育や研究その他の管理業務に忙しい名大教員に配慮して、昼食時間である12:00～12:40に連続4回からなるFDプログラムを実施した。また、昼食の持ち込みも可能とし、当センターからは、紅茶やコーヒーを提供した。内容は、4回通して受講するのが望ましいが、関心のある回だけの受講であっても歓迎する方式をとった。以下が、各回のテーマと参加者数である。

日時：2005年5月10日（火）～13日（金）12:00～12:40

会場：名古屋大学 高等教育研究センター会議室（東山キャンパス 文系総合館5階）

司会・進行 戸田山 和久 センター長

第1日目「なぜ授業改善が求められているのか？」（夏目 達也 教授）

参加者 10名

第2日目「学生がより学ぶための授業の方法」（中井 俊樹 助教授）

参加者 10名

第3日目「学生の学習を支援するシラバスを作ろう」（中島 英博 助手）

参加者 14名

第4日目「学生は何を求めているか？」（近田 政博 助教授）

参加者 16名

延べ参加者数 50名

1 ランチタイムFD 1日目

「なぜ授業改善が求められているのか？」

夏目 達也

ランチタイムFDについて

これから、4日間にわたり、お昼休みの時間を活用したFD、すなわちランチタイムFDを開催します。開催に先だって、このFDの趣旨について簡単にご説明します。

ランチタイムFDは、高等教育研究センターが主催するものです。名古屋大学では、FDといえば、全学教育科目担当教員を対象に、毎年春と秋の2回にわたって開催しているFDがよく知られています。ここには約300人の教員が一堂に会して、全学教育科目を担当する上での留意事項、授業評価アンケートの分析結果、学外有識者による講演、各分科会に分かれての実践報告やそれに基づく討論会等が行われています。このFDは、参加者が多数であること、時間もほぼ半日を費やして行われることなど、名古屋大学の学内に限定してみると、他にはない特徴をいくつか持っています。

それに対して、同じ学内で実施しているとはいえ、当センターが企画し実施してきたFDは、大人数で行う集団的なものではなく、比較的少人数で行うものが中心です。また、出席等が強制されるものではなく、あくまでも各教員の自発性を尊重しています。今回企画しましたFDもこうした考え方の延長線上に位置づくものです。お昼休みという短い時間に集中して行われること、参加者も当面は少人数であることなどが特徴です。

今回は本日を含め4日間連続で開催します。各回の開催日とテーマは以下のとおりです。

- ・第1回 なぜ授業改善が求められているのか？
- ・第2回 学生がより学ぶための授業の方法
- ・第3回 学生の学習を支援するシラバスをつくろう
- ・第4回 学生は何を求めているか？

ランチタイムFD(第1回) なぜ授業改善が求められているのか？

名古屋大学高等教育研究センター
夏目 達也



ランチタイムFDについて

- 授業改善に必要な事項を、短い時間で一緒に学びましょう。
- 各回のテーマ：
 - 5月10日(火) なぜ授業改善が求められているのか？
 - 5月11日(水) 学生がより学ぶための授業の方法
 - 5月12日(木) 学生の学習を支援するシラバスをつくろう
 - 5月13日(金) 学生は何を求めているか？

第1回の内容

- なぜ授業改善が必要なのか
授業改善を必要とする環境の変化
- 高等教育研究センターによる授業改善サポート

1回目の内容

このランチタイムFDは本日が1回目です。担当は私、夏目です。私の報告の内容は以下のとおりです。

- ・なぜ授業改善が必要なのか
- ・高等教育研究センターによる授業改善サポート

前者では、授業改善を必要とする環境の変化について説明します。後者では、授業改善のために、高等教育研究センターが全学の教員に向けてどのようなサポートを提供しているかをご紹介します。

授業改善で悩みの解消

授業改善が求められる一番大きな理由は、授業に関する教師自身の悩みを解消するためです。授業がうまくいかないと、学生は不満を持ちますし、授業を行っている教員も悩みます。良心的な教員ほどその悩みは深刻ですし、他の授業や研究活動にも多少とも影響を与えます。そこで授業を改善しようということになりますが、もちろん、そのためにはそれなりの方法を学ぶ必要があります。主な手順は次のような者になると思われます。

授業環境・不調の背景を知る。

授業がうまくいかないのにはそれなりの理由があるはずで、それを的確に知ることが授業改善の第1歩です。

授業改善の手法を学ぶ

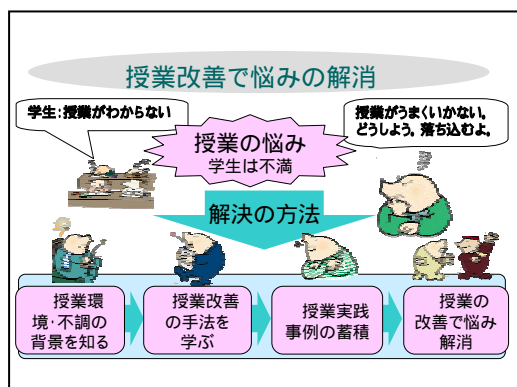
授業改善のための手法は、多くの大学、機関、教員個人等によって開発され蓄積されています。自分の状況をふまえて、自分のあった手法を探し、それに学ぶことが必要です。

授業実践事例の蓄積、

他の機関、人による実践事例に学び、それを参考にして実践をすること、その経験を蓄積していくことが必要です。

授業の改善で悩み解消

その蓄積を新たな授業場面で活用して試みる必要があります。それを丁寧に繰り返せば、かなりの程度授業を改善することはできるはずで



なぜ授業改善が必要なのか 授業改善を必要とする環境の変化(1)

- 大学に対する社会の視線の熱さと厳しさ
- ・熱さ: 期待の高まり
 - ・厳しさ: 期待の高まり
- 人材の育成、最先端の研究成果
- ・厳しさ: 投入した資金(税金)に対する効果
- 経済のグローバル化の中で経済競争力の強化につながる研究開発や人材育成が求められている。
- 教育の質が大学評価の重要項目に
- ・教育の質で大学が選ばれる時代に

授業改善を必要とする環境の変化(1)

なぜ授業改善が必要なのか、その背景には授業改善を必要とする環境の変化があります。最も大きいのは、大学に対する社会の視線の熱さと厳しさということです。熱さというのは、大学に対する期待が高まっているということです。人材を育成すること、その人材や最先端の研究成果を社会に還元することが、大学には強く期待されています。一方、厳しさというのは、投入した資金に対する効果が問われているということです。国公立大学にはもちろん私立大学にも税金が投入されているわけで、それに見合った効果を各大学はあげているのかが、従来以上に厳しく問われるようになってきました。経済のグローバル化が進む中で、経済競争力の強化につながるような研究開発や人材育成等をおこなうことが社会から求められています。

さらに、近年、大学評価が厳しくなっていますが、その中で教育の質が評価の重要項目になっていることも授業改善が求められるようになってきている背景として無視できない点です。それはたんに評価機関等による評価ばかりではなく、学生・父母による評価でも同様です。教育の質で大学が選ばれる時代になりつつあります。その傾向は、今後ますます強まると思われます。より多くの優秀な学生を集めること、そのことにより優秀な学生を多く輩出すること等のためには、よい授業を行うことが求められているのです。

授業改善を必要とする環境の変化(2)

学問・研究活動の進展に伴う変化も見逃すことはできません。各学問分野において研究の進展、情報量の飛躍的な増加がみられます。それに伴って、教育・指導の内容・方法の変化、改善が求められるということです。どの学問分野でもそうでしょうが、とりわけ理系の各分野ではその傾向が著しいのではないのでしょうか。そのため、従来型の一斉講義中心の「知識伝授型」の教育だけでは十分ではなくなりつつあります。

授業改善を必要とする環境の変化(2)

- 学問・研究活動の進展に伴う変化
- 各学問分野における研究の進展、情報量の飛躍的な増加。
 - それに伴う教育・指導の内容・方法の変化、改善が求められる。
 - 従来型の一斉講義中心の「知識伝授型」の教育だけでは不十分に。

授業改善を必要とする環境の変化(3)

- 学生をめぐる状況の変化
- 学力の多様化
 - ・ 高校教育の多様化政策による影響
 - ・ 学習指導要領の改訂でさらに多様化が進む

授業改善を必要とする環境の変化(3)

授業改善が求められる背景として、学生をめぐる状況の変化があります。大学は毎年新しい学生を迎えることはありえません。年々変化しているのが実情です。変化は多くの面にわたっていますが、その一つは学力面です。これにはもちろんそれなりの原因があります。もっとも大きいと思われるのは、文部科学省による高校教育の多様化政策です。高校教育の多様化政策それ自体は、1960年代から実施されてきたものですが、その当時は主たる対象は職業学科でした。しかし近年は、普通科について多様化が進められています。これに拍車をかけたのが、高校学習指導要領の改訂です。

高校の学習指導要領改訂の主な特徴

必修科目単位数を縮減、選択履修の余地を拡大した。
「総合的な学習の時間」を新設。内容・実施方法等を各学校の裁量に委ねる。
学校設定教科・科目を可能にした。
生徒の興味・関心に応じ学校独自で設定。
1単位時間の弾力化を図り、従来の標準50分を学校の裁量で変更可能にした。

高校の学習指導要領改訂の主な特徴

学習指導要領は、小学校から高校までの教育課程の大枠を示したのですが、教科書はその内容をふまえて作成されていることもあり、各学校の教育内容を事実上規定しています。もっとも新しい高校の学習指導要領は、2003年度から学年進行で実施されています。ちなみに、この学習指導要領の下で高校教育を受けた生徒が大学に入学してくるのは2006年度です。この学習指導要領の主な特徴は、以下のとおりです。

必修科目単位数を縮減、選択履修の余地を拡大した。

「総合的な学習の時間」が新設されました。その内容や実施方法等は各学校の裁量に委ねられています。

学校設定教科・科目を可能にした。生徒の興味・関心に応じ学校独自で設定できるようにしました。

1単位時間の弾力化を図り、従来の標準50分を学校の裁量で変更可能にした。

このような学習指導要領で学んだ学生たちの学力には、かなりのばらつきが見られるようになっています。

授業改善を必要とする環境の変化(4)

高校生に顕著になっている多様化は、学力面にとどまらず、学習行動や進路意識の面でもみられます。たとえ

授業改善を必要とする環境の変化(4) 高校生の学習行動や進路意識の多様化

- 自宅での学習時間：学力水準による格差
- 平日に1教科60分以上勉強する生徒の割合
数学：成績上位層 約80% 下位層 約45%
英語：成績上位層 約90% 下位層 約55%
- 成績上位層でも自主的な学習行動への取組は受動的学習と比べて低い水準
上位層(ベネッセ模試で偏差値59.5以上)
下位層(同 45.0以下)
(ベネッセ『高校生の学力変化と学習行動』、2002年)

ば、自宅での学習時間：学力水準による格差です。ベネッセによる調査によると、平日に1教科60分以上勉強する生徒の割合は、数学については成績上位層約80%：下位層約45%、英語では成績上位層約90%：下位層約55%という状況です(上位層はベネッセ模試で偏差値59.5以上の生徒、下位層は同45.0以下の生徒です(ベネッセ『高校生の学力変化と学習行動』、2002年より)。成績上位層でも、自主的な学習行動への取組は受動的学習と比べて低い水準にあります。

授業改善を必要とする環境の変化(5)

授業改善を必要とするその他の環境の変化として、大学教育に対する高校教員の意識あるいは評価が変化していることが挙げられます。たとえば、高校教員が進路指導で重視する項目をみると、教学内容、入試関係情報、卒業生に対する社会的評価への関心が高いが、教育方法改善への取り組みや専門教育の充実度への関心も低い。「教学内容」(60.9%)、「卒業生に対する社会的評価」(54.9%)、「入試選抜に関わる情報」(47.4%)という状況です。これらに加えて、「教育方法改善(FD)への取り組み」(29.6%)、「専門教育の充実度」(27.6%)などへの関心も決して低くない水準にあります(ベネッセ『高等学校の進路指導に関する意識調査』'04年より)。つまり、優秀な学生を多く入学させたいと思う以上、高校の進路指導担当教員に評価されるような授業を行うことが求められていると言えます。

授業改善を必要とする環境の変化(5) 高校教員が進路指導で重視する項目

- 教学内容、入試関係情報、卒業生に対する社会的評価への関心が高いが、教育方法改善への取り組みや専門教育の充実度への関心も低い。
「教学内容」(60.9%)
「卒業生に対する社会的評価」(54.9%)
「入試選抜に関わる情報」(47.4%)
「教育方法改善(FD)への取組」(29.6%)
「専門教育の充実度」(27.6%)
(ベネッセ『高等学校の進路指導に関する意識調査』'04年より)

なぜ授業改善が必要なのか

これまで、主に外部的な条件を中心に教育改善の必要性について述べてきました。今度は、やや内的な条件を中心にみてみましょう。なぜ授業改善が必要なのか、それは一つに、教育は教員の職務であるということです。研究とともに教育は重要な職務であります。専門職としての職業倫理の観点から教育を疎かにすることは許されずです。教育と研究は矛盾するか。矛盾ととらえると、教育は負担でしかないくはないでしょうか。教育は研究成果を発表・還元する機会でありますし、すぐ

なぜ授業改善が必要なのか

- 教育は教員の職務
・研究とともに教育は重要な職務
・専門職としての職業倫理の観点から教育を疎かにすることはできない。
- 教育と研究は矛盾するか。
・矛盾ととらえると、教育は負担でしかない。
- 教育の捉え直しが必要。
・教育は研究成果を発表・還元する機会
・すぐれた研究によるすぐれた教育の創造

れた研究によるすぐれた教育の創造する大切な現場でもあります。これを大切に、質の高い授業を実現すること、そのために、日々の授業改善を行うことが必要になっているのです。

教育活動の中心としての授業

多くの場合、授業は教育活動の中心を占めるものです。大学の教員である以上、教育活動から逃れることはできません。そうであれば、授業をたんなる負担、研究の妨げというような後ろ向きの発想ではなく、前向きにとらえた方が建設的です。どうせ行うのであれば、楽しく、研究活動にもプラスになるように行った方がストレスはたまりません。

改善に取り組むことは、自分自身の職務に誠実に遂行することであり、そのことにより得られる満足感は決して小さくありません。授業改善ができれば、授業がうまくいかないという悩みやそれにともなう余分な時間・労力を節約することができますし、結果的に研究時間の確保につながります。また、学生の反応もよくなり、自分の研究室に優秀な学生を確保することにもつながり、将来みずからの研究の後継者を養成するための第1歩にもなります。

優れた授業を行うための条件：UCバークレーの教訓

授業改善を行うためには、改善しようとする意志が必要であることは言うまでもありません。しかし、それだけでは不十分であり、それなりの手法を学ぶ必要があります。

この手法の研究・開発という点で実績を上げているのはアメリカ合衆国の大学ですが、その数多い大学の中でカルフォルニア州立大学バークレー校の取り組みは我が国でも注目されています。同校が指摘するすぐれた授業を行うための条件は、以下のようなものです。

(B.G. Davis, L. Wood and R. Eilson, *ABC's of Teaching with Excellence*, 1983.)

授業準備のための戦略を立てる。

なぜ授業改善が必要なのか 教育活動の中心としての授業

授業改善のメリット

- 職務の誠実な遂行による満足感
- 授業の悩みを解消
- 時間・労力の節約 研究時間の確保へ。
授業改善の手法を学び授業効果を高める。
- みずからの研究の後継者養成の第1歩
授業で学生を育てる。
優秀な学生の確保。

優れた授業を行うための条件 UCバークレー校の教訓

授業準備のための戦略を立てる。
科目の位置づけをしておく。
授業の流れと展開を考えておく。
魅力ある授業展開を心がける。
自発的に学ばせることを意図する。
学生との接し方に注意を向ける。
エキサイティングな授業展開を心がける。
理解度の確認を常にする。

科目の位置づけをしておく。
授業の流れと展開を考えておく。
魅力ある授業展開を心がける。
自発的に学ばせることを意図する。
学生との接し方に注意を向ける。
エキサイティングな授業展開を心がける。
理解度の確認を常にする。

高等教育研究センターの取組

高等教育研究センターは、国内外の研究成果をふまえて、優れた授業を行うためのノウハウを無理なく、習得するためのツールの開発を行っています。国内の各大学のFDの実施状況を見ると、多様なコンセプトに基づいてさまざまなFDが行われています。その中で、高等教育研究センターは新たなコンセプトのFDを追求しています。冒頭にも述べましたが、それは集団型FDではなく、比較的少人数で行うものを中心とすること、とくに個別の取組を重視していること、強制ではなく、あくまで教員の自発性を尊重することです。高等教育研究センターが開発したツールはこうしたコンセプトに則ったものです。

あえて述べればつぎのように言うことができます。「いつでも」「どこでも」「だれでも」です。「どこでも」というのは時間的な制約が少ないことです。集団でのFDとは異なり、あらかじめ特別の時間を設定しなくても、思い立ったときに、自分の都合がつく時間だけ、短時間で授業改善ができます。「どこでも」というのは場所を問わないということです。集団でのFDのように特定の場所に赴く必要はありません。研究室でも自宅でも出張先でも授業改善ができます。「だれでも」というのは、特別の知識・技能がなくてもできるということです。開発したツールは、コンピュータソフトですが、使い方はきわめて簡単で、特別の知識・技能は不必要です。このように、使いやすいツールであるというのが、大きな特徴です。

高等教育研究センターの取組

- 優れた授業を行うためのノウハウを無理なく習得するためのツールの開発
- 新たなコンセプトのFDを追求
 - 集団型FDでなく個別の取組: 教員の自発性を尊重
 - いつでも: 時間的な制約が少ない
 - どこでも: 場所を問わない
 - だれでも: 特別の知識・技能は不必要

高等教育研究センターによる
授業改善のサポート: ツールの開発

『成長するティップス先生』
授業改善のヒント・ノウハウ集
『ゴーイング・シラバス』
ウェブ上でシラバスを展開。学生との
双方向の授業を可能にする。
『スタディ・ティップス』
学生の勉学を支援するためのガイド

高等教育研究センターによる授業改善のサポート： ツールの開発

高等教育研究センターが開発した授業改善支援ツールは以下のようなものです。

1) 『成長するティップス先生』

高等教育研究センターは、授業改善に役立つ多様なティーチング・ティップスを蓄積し、それをウェブ版と書籍版で公開しています。それが『成長するティップス先生』です。授業の現場における教員の悩みの解決にすぐ役立つヒントを、わかりやすい言葉で表現していることが特徴です。たとえば、教科書を選ぶときのポイントはなにか、毎日の教材を効果的に作成するのはどうすればよいか、大人数の講義で集団討議をするにはどうすればよいか等について提起しています。

2) 『ゴーイングシラバス』

これはウェブ上で展開するシラバスです。特徴はいかのようなものです。授業目標に沿って、毎回の授業計画を立てることができる、授業計画に対応して、授業時間外に行う学習課題を与えることができる、毎回の授業中に行った活動をファイルやテキストの携帯で記録・保存できる。

3) 『スタディティップス』

これは、学生の勉学を支援するためのガイドであり、円滑に学生生活を送るためのヒント・ノウハウ集です。『成長するティップス先生』が教員向けのティップス集であるのに対して、こちらは学生向けティップス集です。

高等教育研究センターによる授業改善のサポート： 相談等

高等教育研究センターでは、上記の授業改善支援ツールのほかに、授業改善のためのさまざまなサポートを行っています。

第1に、授業の悩み相談です。誰でも日々の授業に関して悩みを抱えていると思います。その悩みについて、

高等教育研究センターによる 授業改善のサポート：相談等

- 授業の悩み相談
プライバシー厳守。よりよい授業実現のために一緒に考えましょう。
- メンターの紹介
ベテラン教員による指導・助言
- 授業見学
ご要望に応じて見学し、改善提案をします。一緒に授業を見学しましょう。

相談に応じます。もちろん、プライバシーは厳守します。よりよい授業実現のために一緒に考えましょう。

第2に、メンターの紹介を行っています。メンターというのは、初任者の教員、他大学等から転入したきたばかりで授業の悩みを抱える教員に対して、授業改善のために必要なアドバイスを行う教員のことです。自らの経験に基づいて、授業改善のためのノウハウをもつベテランの教員は名古屋大学には多数います。その方々との橋渡しを高等教育研究センターが担います。

第3に、ご要望に応じて、高等教育研究センターの教員が先生方の授業見学をします。授業改善のためには、しばしば第三者の判断・意見が有効です。また、自らの授業を第三者に見学してもらうだけではなく、他の教員の授業を見学することも、授業改善の重要な機会になるはずで、授業見学を通じて、お互いの授業改善のために率直な意見交換をしたいというのが、高等教育研究センターの長いです。

高等教育研究センターによる授業改善のサポート： セミナー・FD

高等教育研究センターは、名古屋大学の学内外の教員の授業改善をサポートするために、各種のセミナーやFD活動を実施しています。

第一は、招聘セミナーです。これは学外講師による講演であり、ほぼ毎月1回開催しています。そのときどきのホットなテーマを取り上げて、学識や経験のある講師を招いて授業改善につながる話題を提供しています。

第二に、客員教授セミナーを開始しています。高等教育研究センターは、毎年、国内外の高等教育研究者を客員教授として招聘しています。その客員教授による講演です。このセミナーを名古屋大学の学内外に開放しています。

第三に、FD講演・ワークショップへの講師派遣を行っています。高等教育研究センターは、従来から学内外でFDを開催してきました。今回のランチタイムFDもその一環です。今後とも、学内の要望に応じて適宜開

高等教育研究センターによる 授業改善のサポート：セミナー・FD

- 招聘セミナー：学外講師による講演。ほぼ毎月1回、ホットなテーマで実施。
- 客員教授セミナー：客員教授による講演
- FD講演・ワークショップへの講師派遣
- FDの開催
ランチタイムFD
学内の要望に応じて適宜開催

催します。

高等教育研究センターによる授業改善のサポート

高等教育研究センターは、名古屋大学の学内外の教員の授業改善をサポートするために、以下のような各種の出版物を発行しています。

高等教育研究センターによる 授業改善のサポート：出版物

- ジャーナルの発行『名古屋高等教育研究』
高等教育に関する論稿を掲載。投稿を！
- ニュースレターの発行
- 資料室の活用
高等教育関係の資料を活用できます。
必要な資料・文献等の入手等のアドバイス
- メーリングリストへの登録：
セミナー等の案内を差し上げます。

ジャーナルの発行『名古屋高等教育研究』

毎年1回発行しています。ここには高等教育に関する論稿を掲載しています。授業改善につながるような研究論稿や実践報告等の投稿を受け付けております。ぜひ、ご投稿ください。

ニュースレターの発行

現在、紙面の大幅刷新を検討しています。年4回発行にすること、体裁も大幅に改めて親しみやすく、読みやすいものにすることを計画しています。

資料室の活用

高等教育研究センターには資料室があります。ここには、高等教育関係の資料を収集・展示しており、学内の教員であれば誰でも閲覧することができます。

必要な資料・文献等の入手等のアドバイス

授業改善に必要な資料や文献等は、高等教育研究センターで収集しています。ない場合には関係機関に問い合わせるなどして、収集に便宜を図っています。

メーリングリストへの登録

セミナー等の案内を差し上げます。ぜひご登録ください。

【質疑応答】

質問者

諸外国の大学、とくにオーストラリアやニュージーランドの大学の教育水準は高いといえますか？

夏目

教育水準は全般に高いと言って差し支えないように思われます。英語圏ということもあり、アメリカやイギリスにおける研究や大学等での実践の成果を参考にしつつ、両国のよいところを取り入れて、自国の大学改革を行っています。とくにオーストラリアは海外からの留学生受入による収入が外貨獲得に手段になるなど、自国の重要な産業になっています。そのため、教育の質の維持・向上に神経を使っています。先頃発表されたイギリスの新聞 TIMES でも、オーストラリアの大学は高く評価されています（ただし、評価の指標は研究活動であるため、ただちに教育の質が高いとはいえませんが）。

質問者

かつて高校教育の水準は高く、期待できていたのが、なぜできなくなったのでしょうか。

夏目

かつては大学の設置が抑制されており、大学の入学者選抜はそれなりの関門であり、勉強の動機付けとして一定程度の機能を担うことができました。しかし、大学設置等の規制緩和や少子化の中で、大学全入といわれるほど入学が易くなり、勉強の動機付けとして機能しにくくなりました。生徒の気質が変わり、何が何でも難関校入学をめざすという生徒が少なくなったという事情もあります。くわえて、近年の学習指導要領の改訂による学習内容の削減も大きな影響を与えています。必修単位の削減、選択の幅拡大により、履修していない科目・領域が増えており、生徒の学力水準はかつてとは大きく異なっているとみるべきではないでしょうか。

質問者

社会科で言えば、歴史の事実を知らないということでしょうか。

夏目

それも一例だと思います。世界史は必修になっていま

すが、たとえ歴史上の事実を覚えても、受験が終わればすぐ忘れてしまいが実情です。国語でもごく基本的な言葉を知らない生徒は少なくありません。かつては予備校は、高校での基本的な学習を前提に、受験のテクニックを教えれば良かったのに、最近では高校で基礎が形成されていないので、基礎から指導しなければならないと嘆く関係者もいます。

質問者

センターは、授業改善のための多様な活動を行っていることは理解できましたが、その他にどのような仕事を行っているのでしょうか。たとえば、大学ランキングの調査などを行っているのですか。

夏目

高等教育研究センターは名古屋大学の組織マネジメントの質向上に資する研究も行っています。大学ランキングを作成しているわけではありませんが、たとえば科研費の獲得状況等に関して主要大学間で比較・分析等を行っています。

質問者

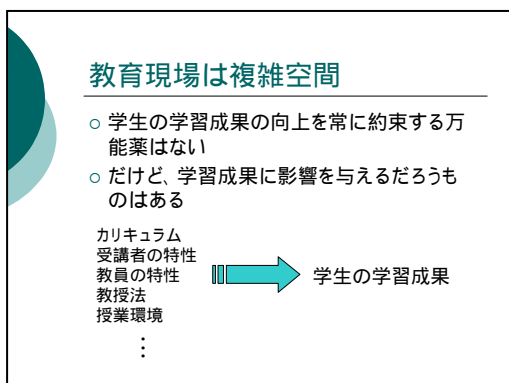
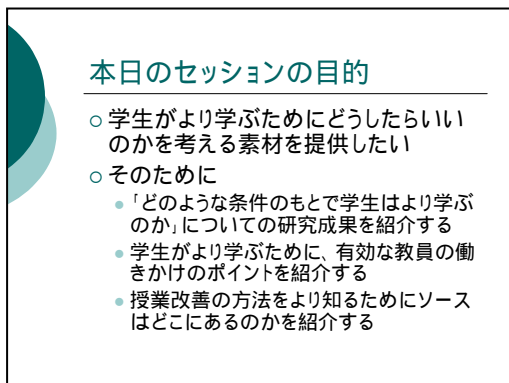
本日の説明では、カルフォルニア大学バークレー校の授業改善のためのアイデア集である『授業をどうする』が紹介されましたが、この本はバークレー校で売られているのでしょうか。

夏目

バークレー校でもっとも売れているのは、『授業の道具箱』（バーバラ・グロス・デイビス著、香取草之助監訳、東海大学出版会）という書籍です。しかし、本日紹介したこの本も有名です。

2 ランチタイムFD 2日目 「学生がより学ぶための授業の方法」

中井 俊樹



本日のセッションの目的

本日のセッションは、「学生がより学ぶための授業の方法」です。このセッションのねらいは、「学生がより学ぶためにどうしたらよいかを考える素材を提供したい」ということです。そのために、私の方から三つの内容に関して情報提供しようと思います。まず、「どのような条件のもとで学生はより学ぶのか」についての私なりの考えを紹介します。次に、名古屋大学の経験などから、学生がより学ぶために、どのような働きかけや制度的サポートがあるのか、そしてできるのかを紹介します。最後に、授業改善の方法をより知るためのソースはどこにあるのかを紹介します。

教育現場は複雑空間

教育という現場が非常に複雑な空間であるということは、多くの方もご存知だと思います。教師のちょっとした一言が学生のその後の学習に大きな影響を与えるかもしれないし、授業を通じた学生同士の出会いがその学生たちの一生を変えることもあるかもしれません。同じ教師の働きかけでも学生によっては受け止め方も異なります。化学反応のようにAとBを混ぜれば必ずCができるというようにはいきません。これさえやっておけばという万能薬がなかなかないというのが教育の現場なのではないでしょうか。

したがって、ある側面において教育学は気象学に近いように思われます。天気予報というのは必ずあたるようなものではないが、予測するための方法は考えられています。必ずあたりはしないけれども、どのような要素が天気に関係があるのかは研究されています。

教育学者の研究

- 教授法と学生の成果との相関分析研究 (Feldman, 1997)
 - 30以上の従来の実証研究をレビュー
 - 教授法28項目と学生の成果との相関係数の平均を算出
 - それぞれの教授法が学習成果に与える影響の大きさを相関係数で示す

研究から学べるもの

- 教授法において何が大事なのかという研究は積み上がっている
- だがそれぞれ覚えるのは大変かも
- あえて大胆にまとめるならば、2つのキーワードが浮かび上がってくる

Design & Involvement

- 目標にそった授業デザイン
- 学生を巻き込み参加させる

教育学者の研究

どのような要素が学生の学習成果に影響を与えるのでしょうか。気象学と同じように教育学者も教授法と学生の学習成果との関係を研究してきました。ここでは、代表的なものとしてフェルドマンの研究成果を紹介します。

フェルドマンは、30以上にわたる教授法と学習成果との相関に関する実証研究をレビューし、28項目の教授法と学生の学習成果との相関係数の平均を算出しました。つまり個々の教授法の要素が学習成果にどれほど影響を与えるのかをまとめたのです。その結果の上位14項目を示したものが表2です。表の右側の数値は相関係数を表し、大きければ大きいほどその教授法が学習成果に影響を及ぼす可能性が高くなります。

この研究から学べるもの

フェルドマンの研究成果から読み取れるものはいくつもあります。たとえば、「教員の準備、コースの設計」が最も学習効果に影響を与えるものであり、学生が感じる教員の熱意というのはその半分くらいの効果しかないといったことも興味深い結果です。

ここでは、あえて大胆にまとめると学習成果に影響を与える要素は2つのグループに分類できるのではないかと指摘します。その2つのグループとは、授業設計と学生参加という二つの概念です。

表2にて、「教員の準備、コースの設計」、「授業目標にそった授業」、「授業で期待される学習成果の理解」、「授業目標と履修要件の明確さ」などは授業設計に関連する要素であると言えます。つまり、このグループはどのように授業全体を設計するのかという計画段階が重視される要素群なのです。

一方、授業設計に関連する要素を除いた要素をあえて一つの集合にするならば、どのように学生を巻き込み参加させるかという授業の実施段階における働きかけが重視されるグループになります。「学生に対する高い水準への動機づけ」や「質問の促進と他の意見への寛大さ」などは、学生を授業に巻き込み参加させるための手段とし

て捉えることができます。このように、大学の授業において重要な要素は、大きく分類すると計画段階が重視される授業設計と、実施段階が重視される学生参加に分類される。つまり、大学の授業の成功は、「どのように授業を設計するか」と「学生をどのように参加させるか」という2つの視点が重要であると言えます。

つまり、セッションのねらいの時に述べた「どのような条件のもとで学生はより学ぶのか」についての私なりの考えは、次の通りです。大学教育において、授業設計と学生参加の2つが大事で、この要素をおさえておけば、学生の学習成果は向上するのではと考えています。以降、「どのように授業を設計するか」と「学生をどのように参加させるか」について話していきます。

授業デザイン

授業を設計するという、つまり授業デザインという概念は、なぜ大事なのでしょう。私はこの理由が少なくとも三つあると思います。

第一に、授業のデザイン力というのは、学生の学習成果や満足度が高い相関があるからです。これは、フェルドマン以外の多くの教育学者の研究成果とも合致しています。

第二に、教師にとって学習が比較的容易だということです。教員は、話し方をうまくしてくださいと言われてもすぐには難しい。また、字をきれいに書くことの苦手な教員が、字をきれいに書くようにと言われても、なかなか上達しないかもしれません。しかし、授業デザイン力というのは、これらのスキルと異なり、比較的習得可能なスキルです。したがって、ファカルティ・ディベロップメントなどにおいても使いやすいという側面があります。

第三に、授業のデザイン力が大学の外から求められているからです。現在、大学評価、単位交換、国際化の流れで、大学はカリキュラムに対応した授業目標の明確化、シラバスの充実化、目標にそった成績評価などの授業デザインの強化が求められています。要するに、大学外か

授業デザイン

- なぜ授業デザイン？
 - 授業のデザイン力は学生の学習成果や満足度が高い相関
 - 教師にとって学習が比較的容易である
 - 大学評価、単位交換、国際化の流れでカリキュラム上の授業の教育目標の明確化、シラバスの充実化が求められている
- 高等教育研究センターの研究と経験から
 - 授業デザイン力は大事である
 - シラバスをきちんと作ると効果的であり、かつ効率的でもある

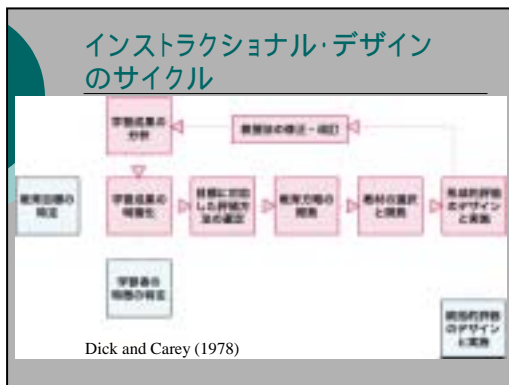
ら教育の出口管理をしっかりとするように求められており、それが授業のデザイン力に関連するのです。

高等教育研究センターでは、授業デザインの重要性を初期の頃から認識していました。そして、授業をデザインする、具体的にはシラバスをきちんと作ると教育上効果的なのだと学内教員に伝えてきました。実際に、シラバスをつくらずに授業を行うよりも、シラバスをきちんとつくって授業を行うと楽になる部分があります。シラバスをきちんとつくると授業が楽だという感想を述べる教員も少なくありませんでした。

インストラクショナル・デザインのサイクル

授業デザインの背後にある教育モデルとして、インストラクショナル・デザインというモデルがあります。このモデルは、最近eラーニングの文脈でよく用いられるモデルですが、1970年代に作られたモデルです。具体的には、1974年に出版されたガニエとブリッグスによる著書や、1978年に出版されたディックとケアリーによる著書に詳しく説明されています。

図1はディックとケアリーが開発したモデルです。簡単にまとめますと、しっかりと明確な目標を設定して、それにそってきちんと評価しようということです。そして、中身を教える時は、評価にそったものにしようということです。目標にそったムダの少ない筋肉質な授業をしようということになります。



授業デザインに関する名古屋大学の取り組み

授業デザインに関してはいろいろと試行錯誤してきました。その取り組みについて話します。高等教育研究センターでは、研究開発物として、『成長するティップス先生』、『ゴーイングシラバス』、『eラーニングハンドブック』、『プロフェッショナルスクールのための授業設計ハンドブック』などを作ってきました。結果として、平成16年度の『特色ある大学教育支援プログラム』の一つとして採択されることになりました。その取り組みのタイトルは「教員の自発的な授業改善の促進・支援 授業支

授業デザインに関する高等教育研究センターの取り組み

- 成長するティップス先生
- ゴーイングシラバス
- eラーニングハンドブック
- プロフェッショナルスクールのための授業設計ハンドブック
- 結果として、平成16年度特色ある大学教育支援プログラム採択された
- 「教員の自発的な授業改善の促進・支援 - 授業支援ツールを活用した授業デザイン力の形成」

援ツールを活用した授業デザイン力の形成」です。

成長するティップス先生

『成長するティップス先生』は、名古屋大学における授業の秘訣やポイントをまとめたものです。これは、高等教育研究センターが1998年に設立されてから2年間をかけて開発したものです。2000年3月にウェブ上で公開しました。「成長する」というコンセプトを大事にしてきましたから、改訂作業も行ってきました。2001年11月と2004年12月に大きく改訂したため、現在ではVer. 1.2です。その改訂のプロセスは、報告書で公開しています。現在は、Ver. 2.0に向けて開発中です。

ウェブ版だけではなく、書籍版もあります。書籍版は、副題にもありますように「授業デザインのための秘訣集」ということで「授業デザイン」という言葉を前面に打ち出しました。玉川大学出版部から2001年に出版され、2005年5月までに第7刷まで増刷されています。

『成長するティップス先生』の反響

『ティップス先生』の反響は期待以上のものでした。名古屋大学高等教育研究センターのウェブサイトには公開以降、毎月約2万件のアクセスがあります。同様に書籍版も全教員へ配布している大学もあるようです。いろいろご意見をいただく機会もありますが、その多くは肯定的なものでした。潜在的なニーズが高かったと言えるのではないのでしょうか。

ゴーイングシラバスのコンセプト

高等教育研究センターでは、『成長するティップス先生』に続く開発物として『ゴーイングシラバス』というシステムを開発しました。『成長するティップス先生』において、本当のシラバスを作ろうと提案したが、提案するだけでは簡単にはできないというのが現状かもしれません。そこで、実際に授業デザインのコンセプトをシラバスという形で具体化するツールを作りたかったのです。名古屋大学の学生にアンケートを取ると、学生はシラ

『成長するティップス先生』

- 名古屋大学での授業のコツやポイントをまとめたもの
- 例えば、
 - 教科書を選ぶときのポイント
 - 初回の授業に何をするか
 - 毎日の教材作成の手間を省くには
 - 大人数の講義でディスカッションをするには
 - 名古屋大学内の授業に関わる連絡先は

『成長するティップス先生』の反響

- 予想以上のアクセス(一日1000件)と増刷(7刷)
- 全国の大学のFD担当者の62%が認知している
- 「大学授業の秘訣・助言・ヒント・コツをこんなにわかりやすくおもしろく豊富に紹介したホームページは今までなかった！中学校・高等学校の授業にも応用可能。私の授業の参考にさせていただきます。」
- 「このページでは、理論に偏ることなく実践に固執することなく、さまざまな事柄に関して、大学教員の役に立つように、具体的に改善方法について指摘してくれます」
- 「大学の教員はいわゆる教育学を学んでないので、こういうのは僕的には助かります」

ゴーイングシラバス

- 授業デザインのコンセプトをシラバスという形で具体化するツール
- 単なる授業選択用のシラバスではなく、学生の学習を促進するシラバスを提案
- アンケートによると学生もシラバスの充実を望んでいる
- シラバスを基点とした授業をしよう、そして記録を残そう
- シラバス論については詳しくは明日のセッションをお楽しみに

バスの充実を望んでいます。シラバスを廃止してほしいとは思っていません。高等教育研究センターでは、『ゴーイングシラバス』というシステムを使って、シラバスを基点とした授業をして、記録をポートフォリオのような形で残してみたらどうかということをご提案したのです。

ゴーイングシラバスの機能

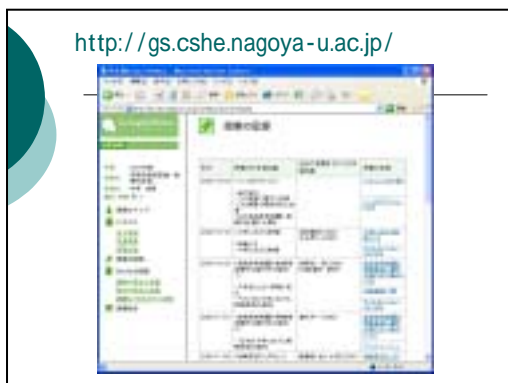
『ゴーイングシラバス』にはさまざまな機能があります。ウェブ上なので、シラバスにそって、教材を載せたり参考文献をアップロードできたり、学生の成果もアップロードすることができます。また、学生も利用できる電子掲示板も用意しました。学生の学習を支援するためのシラバスが書けるように、こうやってシラバスを書いてくださいというような入力ガイドも作り、コースウェアという名前でウェブ上に公開しています。

図3は、私が担当している授業のページで、毎回の授業の予定を組み、学生に当日の授業までに行うべき学習活動が記されています。『ゴーイングシラバス』によって、シラバスにそって授業ができ、それが記録として残ります。また、学生が課題を提出したり意見を述べたりすることのできるページもあり、さまざまな利用方法が考えられます。

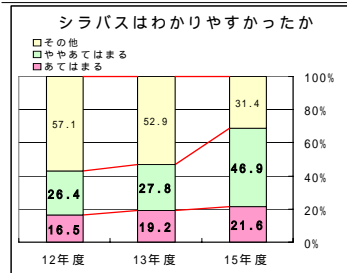
『ゴーイングシラバス』は、さまざまな大学で利用されています。使用した教員や学生の意見などを見ると、『ゴーイングシラバス』は肯定的に評価されています。『ゴーイングシラバス』を利用した授業は、授業アンケートの結果からも、授業時間外の学習時間が長いという結果が出されています。『ゴーイングシラバス』によって、大学教育の一つの課題である授業時間外の学習を促進するということが可能になるのではないかと思います。

名古屋大学の取り組みの効果

以上の研究開発物に加えて、名古屋大学ではファカルティ・ディベロップメントも行っています。「授業デザイン力」を高めるコンセプトの企画もこれまで試みてきました。このような取り組みの効果を明確に表すことは難



全学教育科目の授業デザイン



しいですが、授業アンケートの結果からも推察できます。

学生から見ると、シラバスがわかりやすくなったようです。シラバスがわかりやすくなったと評価する学生の比率は年々上昇しています。この結果に伴い、授業全体の満足度などの他の指標でも増加が見られました。おそらく高等教育研究センターが進めてきた活動と少しは関連しているのではないかと考えられます。授業デザインに対して取り組んできた一連の活動の目に見える成果のひとつなのかもしれません。

学生を大学教育に巻き込み参加させる

- 重要性は多くの教育学者によって指摘されている
- “Students learn more when they are involved.” Astin (1984)
- どのように学生を巻き込み参加させるかという方法は、授業デザインの手法のような明確なステップにまとめることは難しい
 - いくつかの学習理論や教育理論があって、場面に応じて臨機応変に適用することが求められる

学生を大学教育に巻き込み参加させる

次に、学生がより学ぶためのもう一つの要素である「学生を大学教育に巻き込み参加させる」ということについては、最も重要なことかもしれません。アスティンによる“Students learn more when they are involved.”という言葉があるように、学生の参加は教育の基本です。たとえ授業がうまく設計されていても、学生が学習に参加しなければ学習成果は高まらないのではないのでしょうか。

どのように学生を巻き込み参加させるかという方法は、インストラクショナル・デザインに代表される授業デザインの手法のような明確なステップにまとめることは難しいです。むしろ、いくつかの学習理論や教育理論があって、場面に応じて臨機応変に適用することが求められるものです。名古屋大学でも弱い領域です。

優れた授業実践のための7つの原則



- アメリカで最も有名な教授法のひとつ
- Chickering and Gamson (1987)
- 50万部以上の注文
- 50%以上の大学のFDで活用された

優れた授業実践のための7つの原則

ここで紹介したいものは、『優れた授業実践のための7つの原則』（Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education, 以下、7つの原則）です。『7つの原則』は、1980年代後半において米国高等教育学会の研究グループによって開発され、全米をはじめ英国やカナダの大学関係者の間で多く利用されている研究開発物です。この研究開発物は、概要を示した小冊子と、学生用チェックリスト、教員用チェックリスト、大学用チェックリストを含んだ小冊子、の4つの簡素な製本で十数ページにまとめられた小冊子から構成されています。こ

の研究開発物は全米の大学から合計で 50 万部以上の注
文があったと言われています。ファカルティ・ディベロ
ップメントに活用した大学も多くあると言われています。
おそらくアメリカの大学教員の中で最も知られた教授法
ではないかと思います。

「7つの原則」の特徴

『7つの原則』は学士課程教育における優れた教育実
践を行うための原則と具体的な実践手法をまとめたもの
です。これまでも同様な開発物はあったが、『7つの原則』
のように全米の大学に受け入れられたものはありません
でした。その理由は、『7つの原則』のもつ特徴と関連し
ていると言えます。

第一に、学問領域を問わずに使えるということです。
物理学の教員も語学の教員も使える、というコンセプト
で作られたという点です。第二に、教育学に特有な難し
い専門用語を使わなかったという点です。第三に、理念
的なものではなく、実践的なものをリストにしたという
点です。具体的に何をしたらよいのかについてのリスト
になっています。第四に、学生と教員と大学の三者の役
割を示した点です。教育改善に対して教員の責任は大き
いかもかもしれませんが、学生や大学組織にも責任がある
という考え方です。第五に、多くの人が覚えやすいように
7つの原則に集約したという点です。

「7つの原則」の構成

『7つの原則』の原則は、「学生と教員が接する機会を
増やす」、「学生間で協力する機会を増やす」、「能動的に
学習させる手法を使う」、「素早いフィードバックを与え
る」、「学習に要する時間の大切さを強調する」、「学生に
高い期待を伝える」、「多様な才能と学習方法を尊重する」
から構成されています。それぞれの原則は、おそらく多
くの教員にとって納得のできることであり得ると思われ
ます。実際に、学生の学習効果と相関の高い項目です。

7つの原則の特徴

- それまでの教育学研究の成果をふまえて、実践的な教授法の原則を抽出し、全米の大学に公開しよう
- 学生の学習参加度を高めることに重点が置かれている
- 専門分野や授業形態を越えた原則を示している
- それぞれの原則に対応する具体的な実践手法を示している
- 学生・教員・大学の三者の役割を示している
 - 授業改善を教師のみの責任にしない
- 教育学の専門用語の知識なしで利用できる

7つの原則

1. 学生と教員のコンタクトを促す
2. 学生間で協力する機会を増やす
3. 能動的に学習させる手法を使う
4. 素早いフィードバックを与える
5. 学習に要する時間の大切さを強調する
6. 学生に高い期待を伝える
7. 多様な才能と学習方法を尊重する

実際のチェックリスト

先ほど紹介した7つの原則は、多くの教員に納得されるものかもしれませんが、実施することは難しいものです。そこで、それぞれの原則を達成するためのノウハウ「学生と教員が接する機会を増やす」という原則に対しては、学生がどのようにしたらよいのか、教員がどのようにしたらよいのか、そして大学としてはどのような取り組みがあるのかがチェックリストにまとめられています。たとえば、「学生と教員が接する機会を増やす」ためには、学生が「一人以上の教員と授業以外の場面で接する機会を作ろうとしている」、教員が「将来の進路について学生にアドバイスをする」、大学に「学内に学生と教員が個人的に会って話ができる場所や施設がある」という方法です。

本日のまとめ

さて、今回のセッションのまとめですが、どのような条件のもとで学生はより学ぶのかということはある程度わかっています。あえて大胆にまとめますと、目標にそった授業デザインと学生を巻き込み参加させることが大切と言えるのではないのでしょうか。この2つの要素を具体化する方法はある程度まとめられています。今回みなさんに配布した資料や、高等教育研究センターによる研究開発物が参考になると思います。

最後に、授業のさらなる質向上に向けて何をしたらよいのかについてお話したいと思います。第一に、自分の授業実践を少しだけ研究的視点で観察してみたいということです。それは、大学教員の自己研究でもあります。実際の仕事の中で時間を占める教育を第二の研究分野として位置づけることができないかということです。第二に、高等教育研究センターを利用してくださいということです。開発物、セミナー、ジャーナル、ニューズレター、サービス、関連図書など参考になるものがあります。第三に、周りの教員と教育について対話できるコミュニティをつくってみてはということです。教員の多くはさまざまな教授法を試行錯誤しています。FDの

今日のセッションのまとめ

- どのような条件のもとで学生はより学ぶのかということはある程度わかっている。
- あえて大胆にまとめると、目標にそった授業デザインと学生を巻き込み参加させることが大事
- その2つの要素を具体化する方法はある程度まとめられている
 - ランチタイムFDを通して配布した資料
 - 高等教育研究センターによる研究開発物

授業のさらなる質向上に向けて

- 自分の授業実践を少しだけ研究的視点で観察してみたい
 - 大学教員の自己研究？第二の研究分野？
- 高等教育研究センターを利用してみたい
 - 開発物、セミナー、ジャーナル、ニューズレター、サービス、関連図書
- 周りの教員と教育について対話できるコミュニティをつくってみては
 - 教員の多くはさまざまな教授法を試行錯誤している
 - FDの本質は、研究の専門化や高度化によって細分化された大学コミュニティを教育で統合しようとする点にあるという人もいる
 - 同僚と互いに授業見学してみる？

本質は、研究の専門化や高度化によって細分化された大学コミュニティを教育で統合しようとする点にあるという人もいます。仲のよい同僚と互いに授業見学したら得るものが多いと思います。このセッションをきっかけに授業のさらなる質向上に興味をもっていただければと思います。

【質疑応答】

質問者

授業目標の設定で、学生を巻き込むことを、なるほどと思いながら聞いていたんですが、授業目標を決めるということは、特に教員にとっても、どのような授業をやるかということにとってプラスになると思いますし、学生のほうも目標がしっかりしていれば、なぜ今この話をしているのかということがわかるという、そういった面ですごく重要だと思うのですが、重要だからこそ逆に、目標の設定の仕方ということがなかなかわかりづらいです。目標の設定の仕方についてなにか研究されていることがあれば教えてください。

中井

授業の目標を設定するのは難しいというように感じている先生方が非常に多いです。私たちは、三つの視点から作って見たらどうかと提案しています。第一に、カリキュラム目標からの視点です。自分が担当する授業科目が大学のカリキュラム全体の中でどのような位置づけを与えられ、何を期待されているかです。第二に、学問分野からの視点です。自分が教えようとする学問分野ないし主題においては、なにが本質的なポイントであるかです。第三には、学生からの視点です。学生がそのコースを受講するにあたって、どれだけの予備知識と能力をもち、授業にどのような関心を抱いているかです。この3つの視点から授業が終わった時の学習成果のリストを考えたらどうでしょうということです。また、その目標を明確にするときには、学習者が主語になっている、評価

ができるように具体的であるなどのチェックポイントがあります。

質問者

授業デザインに関する高等教育研究センターの取り組みというのがスライドにあります。授業を支援ツールというのは、具体的にはこういったものなののでしょうか。

中井

これは私たちの呼び方ですね。具体的にはティップス先生のウェブ版、ゴーイングシラバス、スタディティップスなどです。これらを何と呼ぼうかということ考えた結果、授業支援ツールと現在呼んでいます。教員のためのリソースと呼んでもいいかもしれないし、ハンドブックと呼べるかもしれません。

質問者

目標を明確化した授業デザインをひとりでやるとなると、時間をかければなんとなくできてくるし、これをきちんとやると、うまくいくでしょう。しかし、もうひとつの学生を巻き込み参加させるやつは、学生にどう対応していくかということがわからないから、これをやると時間をくっちゃうし、途中で時間がきてしまいます。そういうことをいつもやりたいが、なかなかできない。

中井

私たちも多くの教員の現状を理解しているつもりです。今回紹介したものはたくさんありますが、できそうな所から始めてみてもらえばと考えています。たとえば、授業が終わったら教室に残る。そうすると学生が質問をしやすいのではないか。学生と一緒に歩くとか、あいさつするとか、そういった簡単なことから始めてもらうことが大事だと思います。

質問者

ちょっとずつやってほしいということですね。

中井

そうですね。もちろん学内の教員のなかにはここまでやるかという教員もたくさんいます。授業のホームページを作って、授業をすべて録音してアップロードするという教員もいます。そういうことを全員の教員がすべきかと言ったら、すべきではないと思います。その教員は、出席する学生に評判がいいからそれを続けています。ただ、高等教育研究センターは、そういった授業のアイデアを共有できればと考えています。取り入れたい人が取り入れることのできる環境を提供したいと思います。


3 ランチタイムFD 3日目 「学生の学習を支援するシラバスを作ろう」

中島 英博

第1回ランチタイムFD
学生の学習を支援する
シラバスを作ろう

3日目 2005年5月12日

高等教育研究センター
中島 英博
nakajima@cshe.nagoya-u.ac.jp



本日の目的

高等教育研究センター助手の中島です。今日のテーマは「学生の学習を支援するシラバスを作ろう」です。今日のセッションの目的は、3つあります。(1)シラバスは学生の主体的な学習(特に授業時間外学習)を支援するものという考え方を提供する、(2)シラバスの書き方には一定の要件と方法論があることを提供する、(3)高等教育研究センターが提案する取り組みについて意見を交換するというものです。

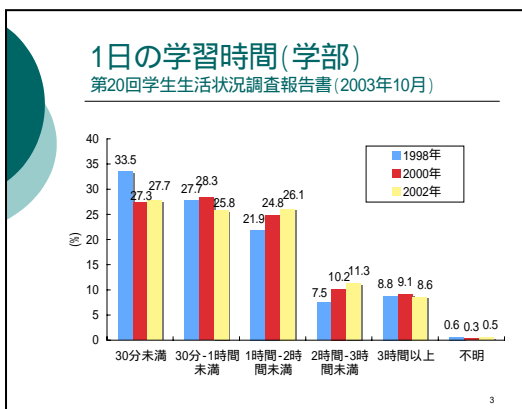
今日のセッションの目的

- 目的
 - シラバスは学生の主体的な学習(特に授業時間外学習)を支援するものという考え方を提供する
 - シラバスの書き方には一定の要件と方法論があることを提供する
 - 高等教育研究センターが提案する取り組みについて意見を交換する

2

名大生の一日の学習時間

本題に入る前に、第20回学生生活状況調査報告書で示されているデータをお見せします。この図は名古屋大学の学生の一日の学習時間(授業時間を除く)に関するグラフです。1998年、2000年、2002年の3回分の調査を比較して示しています。これによると一日の学習時間が30分未満という学生が約3割、30分以上1時間未満という学生が3割弱、あわせると半数から6割弱の学生が、1時間未満という結果です。1時間以上2時間未満という学生は98年の調査以降増えている点は歓迎すべき結果ですが、学生の授業時間外学習は必ずしも十分とはいえないのが現状です。



単位の意味

もう一つ前もって示しておきたいのは、単位の意味です。単位は大学設置基準で、1単位が45時間の学修内容を標準とするとされています。つまり単位は学習時間量の物差しと考えられます。半期2単位の授業では90時

単位の意味

- 1単位は45時間の学修内容を標準とする(大学設置基準)
 - 単位は「学修時間量の物差し」
 - 講義については、教室内における1時間の講義に対して教室外における2時間の自学自習を必要とするものとし、毎週1時間15週の講義を以って1単位とする
 - 教えるべき内容を2単位分あるいは4単位分にカットして学生に与えることと捉えてみよう

4

シラバスの役割

- 授業時間外も含めた学生の学習支援
 - 受講生がある授業科目の単位を取得するために必要な学習(=1単位あたり標準45時間の学習)を、主体的に進める上で必要な情報をまとめた「学習の手引き」(田中)

5

間に相当するという計算です。これには授業時間内の学習と授業時間外の学習を含みます。目安として、講義については、「教室内における1時間の講義に対して教室外における2時間の自学自習を必要とするものとし、毎週1時間15週の講義を以って1単位とする」として示されています。

シラバスの役割

この単位の意味をふまえてシラバスが果たす役割を考えると、「授業時間外も含めた学生の学習支援」のための書類と考えられます。東京電機大学の田中浩朗先生は、シラバスは「受講生がある授業科目の単位を取得するために必要な学習(=1単位あたり標準45時間の学習)を、主体的に進める上で必要な情報をまとめた学習の手引き」と定義することを提唱されています。本質的であり、大変分かりやすい定義ですので、ここに紹介します。

授業要覧とシラバスの混同

日本の大学ではシラバスと言う場合、授業要覧と混同されやすいのではないかと思います。ここで言う授業要覧とは、学生の履修科目選択のための授業案内の冊子を指します。名古屋大学内でも「学修案内」「履修の手引き」「ハンドブック」と呼び方はいくつかありますが、部局ごとに授業要覧を作っています。この授業要覧をシラバスと呼ぶことがあるために、混乱が生じます。

すなわち、授業改善にはシラバスの改善が重要だという場合、この授業要覧を充実させようという方向に動いてしまいます。しかし、シラバスは本来授業の受講生が主体的に学習するために利用する書類であり、全ての学生に向けて冊子化して配布するものではありません。本来役割の異なる二つの書類を一つで済ませようとすると、授業要覧としては不必要に厚くなり、シラバスとしては情報が不十分という中途半端な結果に陥ります。

シラバスには、毎回の授業で学習する内容、毎回の授業が始まるまでの学習活動(準備・予習)、試験・課題の情報(期限・内容・評価の基準と方法)、学習に必要なリ

授業要覧と混同されやすいシラバス

- 「学修案内」「履修の手引き」「ハンドブック」
 - これらは基本的に「授業要覧」だが、しばしばシラバス化しようとする方向に動く
 - 本来性格の異なる2つのものを1つで済ませようとしているため、中途半端になりやすい
- ↓
- 本来のシラバスの役割は…
- 学生の主体的な学習を支援する計画書
 - 毎回の授業で学習する内容
 - 毎回の授業が始まるまでの学習活動(準備・予習)
 - 試験・課題の情報(期限・内容・評価の基準と方法)
 - 学習に必要なリソース(文献リスト・学習ガイド)

6

授業要覧とシラバスは分けて考える

「学修案内」「履修の手引き」「ハンドブック」
学生の授業選択用として存在しており、学習支援としては弱い

授業要覧とシラバスに分離

授業要覧 (Course Description)

役割
学生が履修科目を選択する際に参考になる情報を提供する。
社会に対する大学の説明責任を果たすための情報を提供する。

留意事項
その分野の専門家だけでなくも理解できるように書く。
一貫性を確保するために簡潔に書く。

シラバス (Syllabus)

役割
学生がその科目の学習を進める際の学習の手引きを提供する。
FDにおいて、他の教員から授業目標の書き方や課題の出し方を学び合う資料を提供する。

留意事項
学生が主体的な学習を進める上で必要な情報を、できるだけ多く盛り込む。

授業要覧とシラバスに書くべき情報

- ウェブや冊子で授業開始までに閲覧できることが必要
 - 授業に関する基本情報
 - 教員に関する情報
 - 授業概要
 - 履修条件
- 詳細は資料をご覧ください
- 初回の授業で受講生に配布する内容
 - 授業に関する基本情報
 - 教員に関する情報
 - 履修条件
 - 授業の目的・位置付け
 - 授業の目標
 - 教科書・課題図書など授業方法
 - 授業のスケジュール
 - 課題・レポート・試験
 - 成績評価の方法と基準
 - 受講のルール
 - 学習情報ソース

8

ソース（文献リスト・学習ガイド）が盛り込まれているべきであり、授業要覧とは別の書類として教員が作るべきです。授業要覧とシラバスを分けて考え、授業要覧は学生が履修科目を選択する際に参考になる情報を提供する役割、シラバスは学生がその科目の学習を進める際の学習の手引きを提供する役割と位置づけることから議論を始めることを提案します。

なぜシラバスを取り上げるのか？

このように考えると、授業要覧とシラバスのそれぞれに書くべき内容と配布する時期も自ずと決まってきます。授業要覧では、授業の概要と履修要件が重要な情報になり、ウェブや冊子を通じて授業開始前に学生が閲覧できることが必要です。一方シラバスでは、授業の目標や成績評価の方法に加えて、授業のスケジュール、課題・レポート・試験に関する情報や学習のための情報ソースなど、学習を支援するための情報が必要になります。これは初回の授業で受講生に向けて配るべきで、教員は初回の授業の開始時までにシラバスを作成しておく必要があります。

なぜシラバスを取り上げる？

- 多くの教員がいい授業をしたいと考えている
 - 授業は名人芸？？
- シラバスのノウハウは獲得が比較的容易
 - 他の授業改善ノウハウと比べて方法論化が進んでいる
 - インストラクショナル・デザインという考え方に依拠
 - 授業形態・学問分野・経験年数を問わず取り入れられる部分が多い

9

シラバスが大事な理由

文部科学省が教育改善の具体的な取り組みの一例としてシラバスの充実という項目を示したため、近年シラバスというキーワードが注目されています。高等教育研究センターがシラバスの充実を進める理由は、ノウハウの獲得容易性に注目するからです。

授業をよりよいものにするための取り組みは多岐にわたりますが、教員の個性や特徴に依存する取り組みでは普及しません。シラバスを充実させる取り組みは、ノウハウの方法論化が進んでおり、授業形態・学問分野・経験年数を問わずに取り入れられます。ノウハウの多くはインストラクショナル・デザインという考え方に依拠しています。一般化された研究知見に基づく方法論は、多くの教員に受け入れやすい取り組みになります。

欧米における研究成果に、シラバスを充実させること

シラバスが大事な理由

実際シラバスを作るのは大変ですが・・・

- 学生の時間外学習を支援する上で重要な書類
 - 学習成果との高い相関(昨日のセッション)
 - 学生の学習を最優先にシラバスをつくる
- 一度作っておくと楽になる
 - 授業計画、学習課題がそろっている
 - 毎回の授業の準備が楽に、2年目以降はもっと楽に
- 将来外部から求められる可能性
 - 認証評価への対応

10

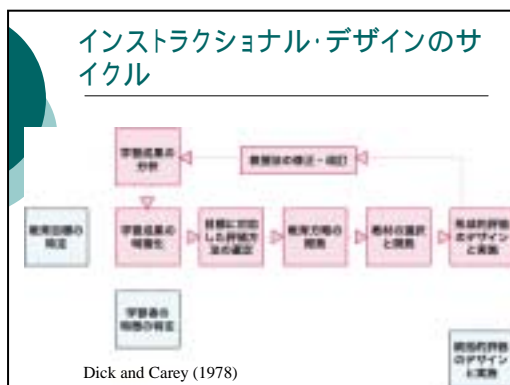
で学生の学習成果が高まるという結果を示したものがあ
ります。学生の授業時間外学習を支援することは、名古屋
大学の現状と照らし合わせると、まず学習量そのものが
増加させる点から、学習成果の向上が期待できます。
また、シラバスは一度作っておくと授業が始まってからの
準備が楽になります。学習課題がそろっており、授業
の目標に沿って毎回の授業内容が計画されているので、
一貫性のある授業の進行が期待できます。さらに、シラ
バスが作成され学生の学習支援に活用されていることが、
将来の認証評価において求められることも予想されます。
これは大学評価・学位授与機構が示した認証評価基準の
中でシラバスの作成に関する観点が盛り込まれているた
めです。

このようにいくつかの理由がありますが、シラバスを
充実させることは教員の教育活動として大変重要なもの
です。

インストラクショナル・デザインの考え方

シラバス作成の方法論の基礎となるインストラクショ
ナル・デザインは、1970年代後半には複数の研究者によ
って発表されています。このインストラクショナル・デ
ザインは、もともと教材開発の方法論として示されたも
のです。eラーニングの発展に伴い効果的・効率的な自
学自習用教材の開発ニーズが高まり、近年注目し直され
ています。

高等教育研究センターからは、この知見を応用してシ
ラバスを書くための9つのステップを示したいと思います。



シラバスを書くための9つのステップ

まずステップ1は「カリキュラムの位置づけとコース
に関する情報を把握する」です。シラバスを書くといっ
てもいきなり書き始められるわけではありません。まず
担当科目がカリキュラム上でどのような位置づけにある
かを確認します。つまり、どのような授業の履修歴があ
る学生が受講するのか、担当する授業を履修した学生が

次にどのような科目を履修するのか、そのために担当する授業ではどのような知識・技能を学生に身につけさせるのかを確認します。また、同時にコースに関する情報を確認します。どのような教室で対象者が何名くらいになり、彼らの学力水準はどの程度なのかを分かる範囲で確認します。

ステップ2は「学習成果のプロフィールをリストアップする」です。これがこの9つのステップのキーポイントになります。ここでは、授業を受け終わったあと学生がどのような知識を身につけているか、どのような技能を身につけているかを考えます。教員が授業で伝えたいことはたくさんありますが、その結果として学生がどのように変化しているかを考えることです。ここでは思いつくままに、20～50個の行動リストとしてリストアップしてみます。この作業が9つのステップの中で一番の難しいところですが一番のキーポイントでもあります。ここでできる限り細かく豊富な学生像をリストアップしておく、以後の作業が大変楽になります。

ステップ3は「授業の目標を決定する」です。ステップ2でリストアップした学習成果のプロフィールを授業の目標として3～5点にまとめます。

ステップ4は、「目標に対する成績評価基準と方法を決定する」です。ステップ3でまとめられた授業の目標に対応して成績評価の基準と方法を決めます。多くの場合、基準は目標に対応して決まるので、試験・レポート・プレゼンテーションなどどのような方法で評価するか、複数の課題で評価する場合にそれらのウェイトがどの程度かを決めます。

ステップ5は、「授業の実施計画を作る」です。ここでもステップ2でリストアップした学習成果のプロフィールに沿って15回の授業計画にまとめていきます。大きくまとめたものが授業の目標、小さくまとめたものが授業計画になります。90分の授業時間に収まりきらないようでしたら、この段階でリストアップしたプロフィールのいくつかを落とさなければなりません。

ステップ6は、「毎回の授業の目標を明確化する」です。

どうやってシラバスを書くか？

シラバスを書く9つのステップ

- ステップ1 カリキュラムの位置づけとコースに関する情報を把握する
- ステップ2 学習成果のプロフィールをリストアップする
- ステップ3 授業の目標を決定する
- ステップ4 目標に対する成績評価基準と方法を決定する
- ステップ5 授業の実施計画を作る
- ステップ6 毎回の授業の目標を明確化する
- ステップ7 毎回の授業の最終課題を設定する
- ステップ8 最終課題に対する毎回の学習内容(コンテンツ)を決定する
- ステップ9 作成したシラバスを振り返って評価する

どうやってシラバスを書くか？

シラバスを書く9つのステップ

- ステップ1 カリキュラムの位置づけとコースに関する情報を把握する
- ステップ2 学習成果のプロフィールをリストアップする
- ステップ3 授業の目標を決定する
- ステップ4 目標に対する成績評価基準と方法を決定する
- ステップ5 授業の実施計画を作る
- ステップ6 毎回の授業の目標を明確化する
- ステップ7 毎回の授業の最終課題を設定する
- ステップ8 最終課題に対する毎回の学習内容(コンテンツ)を決定する
- ステップ9 作成したシラバスを振り返って評価する

12

学習成果のプロフィールに沿って授業の実施計画が決まれば、毎回の授業で学生が到達すべき目標も比較的容易に決まります。

ステップ7は、「毎回の授業の最終課題を設定する」です。毎回の授業の目標が決まると、どのような試験にパスすればその目標に到達したといえるか、という基準が必要になります。授業によっては必ずしも毎回試験を行う必要がないかもしれませんが、こうした視点を持つことで授業計画がより現実的で実施可能なものになります。

ステップ8は、「最終課題に対する毎回の学習内容(コンテンツ)を決定する」です。毎回の授業の目標と最終課題を決めて初めて、毎回の授業でどのような内容を学生に教えるかを考えることになります。

学習成果のプロフィールに沿って毎回の最終課題を決めている場合、その課題を達成するために必要な学習コンテンツは自然と絞られてきます。このステップで最も重要な作業は、授業時間外の学習活動として何をさせるかを考えることです。90分の授業を前提にすると、事前に自習できることは授業時間外の課題として設定しておき、授業時間内は教員の働きかけが必要な学習活動に絞ることができます。それでも90分の授業に収まらない場合は2回分の授業に分けるなど、授業計画の変更を検討します。

最後にこうしたプロセスでできたシラバスを振り返ってみます。同僚やTAからコメントをもらえると自分では気づけなかった修正点などが見つかるかもしれません。

授業目標の表現方法

シラバスを書く9つのステップを示してわかるように、ステップにはいくつかのポイントがあります。その一つが、シラバスでは学習成果のプロフィールに基づく目標の設定です。ここでは、目標を書く際にどのような点に配慮して書けばよいかをまとめたSMARTという標語を紹介します。SMARTとは、Specific(獲得する知識や技能が具体的に設定されているか)、Measurable(目標の到達は評価できるものか)、

授業の目標を書く際の合い言葉

- 目標はスマートに書く
 - Specific
 - 獲得する知識や技能が具体的に設定されているか
 - Measurable
 - 目標の到達は評価できるものか
 - Achievable
 - 学生が到達可能なものか
 - Relevant
 - 学生のニーズにあったものか
 - Timely
 - 社会や時代の文脈にあったものか

13

Achievable（学生が到達可能なものか）、Relevant（学生のニーズにあったものか）、Timely（社会や時代の文脈にあったものか）の頭文字をそれぞれとったものです。

もう一つのポイントはリストアップされた学習成果のプロフィールに基づく授業の実施計画の決定です。実施計画を示す際に、授業時間内に行う学習活動と授業時間外の学習活動にわけて示すよう工夫することで、授業時間外に学生が主体的に学習を進める手助けになります。


授業時間外の学習活動も考慮しよう

この授業時間内の学習活動と授業時間外の学習活動を明確に分けて授業計画を作成できるなど、シラバスを作成するツールとして「ゴーイングシラバス」を高等教育研究センターで提供しています。これまで示してきたように、シラバスは初回の授業で受講生に配布し、授業実施期間中は学生の学習を支援するために使うものです。

「ゴーイングシラバス」は、こうしたシラバスの役割に注目し、授業開始後のシラバス活用を促進するツールです。授業の概要や授業時間内に行う学習活動と授業時間外の学習活動にわけて記入できる授業計画に加え、授業計画に沿って学習教材、配布資料、参考サイトへのリンクなどを示すことができる機能を持っています。また、授業時間外にも教員と学生、あるいは学生同士でコミュニケーションがとれる電子掲示板機能も提供しています。電子掲示板にはファイルを添付する機能があり、授業時間外の学生からのレポート提出などに活用することもできます。実際に利用した教員や学生からは概ね肯定的な評価を得ています。

授業のスケジュールを書く際に


- 授業時間内の学習活動と授業時間外の学習活動を分けて書いておくと学生が活用しやすい



14

効率的にシラバスを作るために

- 他の教員の取り組みを真似することで、効率的なシラバス作成ができる
 - よい事例 (Good Practice) に学ぶ
 - 海外の大学にいる同じ専門分野の先生のシラバスを見してみる
 - 学内の同僚のシラバスを見してみる



- シラバスを組織的に蓄積して活用する仕組みが必要

16

ゴーイングシラバスを使うメリット

少し別の角度から「ゴーイングシラバス」を使う利点を紹介します。それは、他の教員の授業目標、授業計画、授業時間外の学習課題などを見ることができる点です。シラバスを一から作ることは難しく時間のかかる作業です。先に示した9つのステップに加え、既に作られたシラバスの長所を取り入れることで効率的にシラバスを作

ることができます。「ゴーイングシラバス」には過去の自分の授業のシラバスや他の教員のシラバスを読み込む機能を備えています。これ以外にも、海外の同じ専門分野の先生や学内の同僚のウェブサイトを訪問し、公開しているシラバスを見ることもシラバス作りを効率的にします。将来的には名古屋大学でも組織的にシラバスを蓄積し、公開することで活用する仕組みを作っていく必要があると考えています。

効率的にシラバスを作るコツ

シラバスを作る作業は時間がかかるものですが、同僚などからコメントをもらいながら作成する機会を持つと短時間で完成度の高いシラバスにブラッシュアップできます。高等教育研究センターでは2005年の4月にスタッフ同士でシラバス検討会を実験的に開催しました。方法論化しきれない部分をお互いの授業経験や学問分野の特徴を活かして補い合うための企画です。今後は高等教育研究センターのスタッフ以外の先生方も交えて徐々に参加者を拡大する企画にしていくことを検討しています。

効率的にシラバスを作るために

- 高等教育研究センターでシラバス検討会を開催
 - 方法論化できない部分をお互いの経験や学問分野を活かして補い合う
 - まずはスタッフで2005年前期について4月初頭に開催
 - 後期についても開催予定、参加しませんか？
 - ゴーイングシラバスを活用してみませんか？
 - ゴーイングシラバスはシラバスを組織的に蓄積して活用する仕組みにもなる

17

参考資料

- 文献
 - 田中浩朗「大学教育の質向上をめざしたシラバスの活用」(未定稿)
- オンラインシラバス
 - 慶応義塾大学総合政策学部・環境情報学部
 - <http://vu.sfc.keio.ac.jp/course/>
 - 金沢工業大学
 - <http://www.kanazawa-it.ac.jp/syllabus/>
 - http://www.kanazawa-it.ac.jp/curriculum_html/ (カリキュラムマップ)

18

4 ランチタイムFD 4日目 「学生は何を求めているか？」

近田 政博

本日の目的

高等教育研究センター長の戸田山です。今日はランチタイムFDの最終回です。このランチタイムFDは初めての試みでしたので、どのくらい人が集まるのか不安だったのですが、フタを開けてみたら満員御礼ということでスタッフ一同から感謝しております。そのお礼の気持ちを込めて、今日はささやかながらサンドイッチをご用意いたしました。どうか食べ尽くしてってください。最後にアンケートを取らせていただきます。別にサンドイッチで買収しようというつもりはありませんので(笑)どうか忌憚のないご意見をお聞かせ下さい。今日はさまざまな調査をもとにして、名大生はどんなことを考え、どんなことを求めているかを中心に、学生像をみなさんと共有したいと思います。

名大教員は名大生のことをあまり知らないのでは？

センター助教授の近田です。今日のテーマは「学生は何を求めているか」です。昨日までのテーマは「いかに教えるか」でしたが、今日はその対象となる学生がどのような存在かについて考えてみたいと思います。最初に問題提起したいのは、名古屋大学の教員は名大生のことを実はあまり知らないのではないかということです。また、名大生の基礎学力は他大学よりも相対的に恵まれているかもしれませんが、それが学習意欲に結びつくとは限らないということです。最後に、一人の教員として学生のニーズに具体的に応える方法があるとするれば、それは何かということです。こうした問題意識をもちながら、話を進めていきたいと思います。

こうした問題意識を踏まえながら、本日の内容は、名大生の学習・生活状況がどうなっているか、名大生の入学時の学習履歴がどうなっているか、名大生の学

第1回ランチタイムFD 学生は何を求めているか

高等教育研究センター
近田 政博
chikada@cshe.nagoya-u.ac.jp

ひょっとすると？

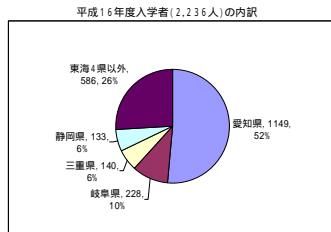
- 実のところ、名大教員は名大生のことをあまり知らないではないか？
- 基礎学力と学習意欲は必ずしも結びつかないのではないか？
- 一人一人の教員として、学生のニーズに応えられる方法があるかもしれない

1. 名大生の学習・生活状況

- 『学生生活状況調査報告書』(第20回)
 - 2002年11～12月に実施
 - 2003年10月発行
 - 在学者の5分の1無作為抽出
 - 回答者数1,272人
 - 回答率66.0%

4

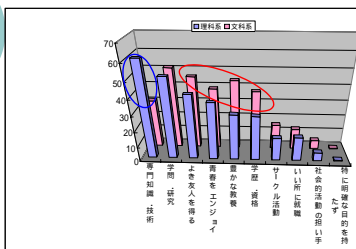
出身地:愛知県内が約半数、東海3県で4分の3を占める



名古屋大学『学生生活状況調査報告書(第20回)』、2003年より

5

大学生の目的: 理系は専門志向、文系は教養志向



名古屋大学『学生生活状況調査報告書(第20回)』、2003年より

6

習意識は学部別にどのように異なるのか、個々の教員がすぐに取り組める授業改善の方法は何か、という順でお話します。

名大生の4分の3は東海地方出身

『学生生活状況調査報告書』というのがあります。これは1963年以降、隔年で実施されている調査であり、全学の学生生活委員会が主管しています。最も新しい報告書は2002年11月に実施された調査で、学士課程1～4年生1,272人から回答を得ています(回答率66.0%)。

まず名大生の出身地についてみてみましょう。平成16年度入学者の内訳をみると、愛知県出身者が全体の52%を占めています。これに岐阜、三重、静岡の東海三県を加えると、全体の74%に達し、ほぼ4分の3が東海地方のように高いのは、旧帝国大学7校の中でも際だっています。比較的似ているのが九州大学ですが、それでも学生は九州全土から集まってくるから、名古屋大学がいかに地元密着型の大学かということがわかります。

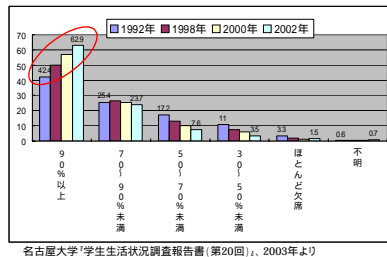
理系は専門志向、文系は教養志向

次に、大学生活の目的をみてみましょう。理系学生は専門知識・技術についての志向性が非常に高いのに対し、文系学生は「豊かな教養」や「学歴・資格」、および「よい友人を得る」「青春をエンジョイする」といった項目にのどちらにおいても「学問・研究」を挙げる学生は多く、一方でサークル活動や「いい所に就職する」ために大学に進学したと回答する学生は全体の1割程度にとどまっています。つまり名大生の多くは、「学生の本分は学習することにある」と考えているようです。

授業の出席率は高くなる傾向

それでは名大生の授業出席率はどうなっているのでしょうか。『学生生活状況調査報告書』のデータを92年、98年、2000年、2002年と経年比較すると、意外なことがわかります。授業の出席率は以前よりも格段に高くなっているのです。わずか10年の間に、90%以上の出席

授業の出席率: 90%以上が多数



名古屋大学「学生生活状況調査報告書(第20回)」, 2003年より

7

20%以上も上昇しています。このことはいったい何を意味するのでしょうか。

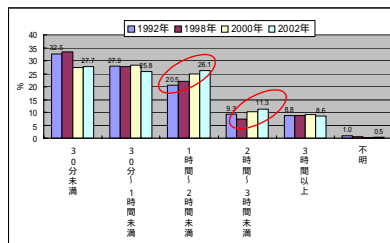
授業出席率を学部別にみると、医学部保健学科、文学部、教育学部などにおいて高く、法学部や経済学部では相対的に低くなっています。この理由はよくわかりませんが、学部による自宅学生と下宿学生の比や男女比の違いなどが関係しているかもしれません。

学習時間や授業内容への満足度は高くなる傾向

一日の学習時間をみますと、1時間未満という学生が過半数を占める状態は変わっていません。ただし、1時間以上あるいは2時間以上学習する学生の割合は、少しずつ増えていることがわかります。

また、授業・研究指導内容への満足度は1992年には「やや不満」とする回答が最も多かったのですが、以後満足度は一貫して高まる傾向にあります。2002年調査では「満足している」と「まあまあ満足している」の合計が5割に達しています。私たち教師は、この結果をどのように解釈したらよいのでしょうか。教師の授業内容が改善されたのか、それとも教室環境が良くなったのか、あるいは何かしらの外的な要因によって学生の学習意欲が高くなったのか、あるいはそれらのすべてなのか。

一日の学習時間(授業時間を除く): 多いとはいえないが、改善傾向にある



名古屋大学「学生生活状況調査報告書(第20回)」, 2003年より

9

インターネット利用度

- 専用パソコンの所有度: 70.8%
- 「ほぼ毎日」利用 49.1%
- 自宅で利用 67.6%

ウェブサーチ、タイピングなどの基礎スキルは以前よりも格段に向上していると考えられる

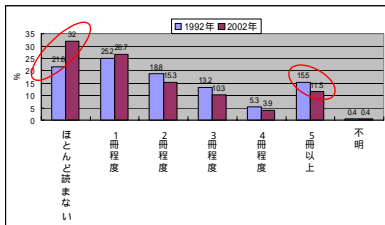
名古屋大学「学生生活状況調査報告書(第20回)」, 2003年より

10

飛躍的に高まるパソコン、インターネットの利用度

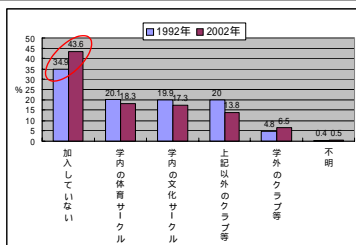
学部生のパソコン所有度をみますと、すでに7割を超えています。インターネットの利用率は「ほぼ毎日」とする回答が半数に達し、自宅利用者も3分の2に達しています。これは2002年の調査ですので、3年後の現在ではもっと高くなっていることが予想されます。これにより、ウェブサーチやタイピングといった基礎的なスキルはかつてに比べて格段に向上していることが考えられます。同時に、学生から提出されたレポートにおいて、ウェブ上で得られた情報の切り貼りが目立つようになったことが、教員から多く指摘されるようになってきました。

一ヶ月の読書量：
少ない読書量はさらに減少傾向にある



名古屋大学1学生生活状況調査報告書(第20回)、2003年より

課外活動：
まったく参加しない学生が増えている



名古屋大学1学生生活状況調査報告書(第20回)、2003年より

学習・生活状況のまとめ

- 愛知県人が多い 自宅通学者が多い
- 専門知識や教養を重視している
- 授業にはまじめに取り組む
- しかし、読書量や課外活動への参加には消極的
基本的にはまじめだが、知的刺激に乏しい生活を送っているのではないか

本を読まない学生、課外活動をしない学生が増えている

こうしたデータは教師にとっては悪い気はしません。

果たして、名大生の学習意欲はどんどん高くなっているといえるのでしょうか。しかし一方では、心配なデータもあります。

一ヶ月の読書量を見ると、「ほとんど読まない」という学生が10年間に10%以上増えているのです。反対に2冊以上読むという学生は減少傾向にあります。私自身が文系1年生対象の基礎セミナーを担当していたときに学生に尋ねたところ、愛読書は漫画だけという学生が何人もいました。教科書や参考書以外に活字を読む習慣が廃さらに、学生の課外活動への参加度をみますと、加入していない学生が10年間に10%近く増えています。たとえば、私自身が名大生だった頃(80年代後半)のランチタイムには、教養部(現在の全学教育棟)の玄関前で学ランを着た応援団がずらりと揃ってデモンストレーションをやっていたものでした。ところが、今日では新入生がほとんど集まらず、解散の危機にさらされていることが新聞の記事になっているくらいです。

平均的な名大生はまじめだが、知的刺激に乏しい？

名大生の学習・生活状況をまとめると、次のようになります。名大生は愛知県人が多く、地下鉄駅が開通して交通アクセスが改善されたので、他の旧帝大などと比べても自宅通学者が多いことが推察されます。彼らは専門知識や教養を重視し、授業にはまじめに出席します。しかし、自発的な読書や課外活動への参加には消極的で、主体的な行動が苦手なようです。基本的にはまじめだけれども、昔と比較しても知的刺激に乏しい学生生活を送っているようです。

「まじめ化」しているのは名大生だけではない！

国立大学生協がまとめた『第39回学生生活実態調査』では、生協のある全国40大学において実施した学部生調査の結果をまとめています。これによると、大学生の一週間の平均登校日数は4.7日となっています。つまり、

大学生協の全国調査

- 『第39回学生生活実態調査にみる学生生活の特徴』
 - 2003年10～11月
 - 全国の40大学の1～4年生
 - 回答数:9436人
 - 回答率:36.1%

15

名大生だけではない！

- 1週間の登校日数:4.7日
- 大学生生活の重点
 - 「勉強第一」27%
 - 「豊かな人間関係」19%
- サークル活動
 - 現在加入していない 41%
- 大学が好きか
 - 好き・まあ好き 83%

16

2. 名大生の学習履歴

- 高校でよく履修してきた科目
 - 数学・数学
 - 英語
 - 化学
 - 数学(理科系)
 - 物理(理科系)
- 高校であまり履修していない科目
 - 地学
 - 生物
 - 現代社会
 - 政治・経済

17

名大入試の傾向 - 理系の英語は無し

- 多くの理系学部の後期日程で、英語は必修でなくなった
 - 理:後期二次は英語なし
後期は一次・二次ともに国語なし
 - 医:後期二次は英語なし
 - 工:後期二次は英語なし
後期は一次・二次ともに国語なし
 - 農:後期二次は英語なし
 - 情報文化(自然):後期二次は英語なし

出典:平成17年度名古屋大学入学者選抜の実施教科・科目について。

平日のほとんどは登校しているのです。私たち教師が学部生だった頃とはだいぶ様相が異なっているようです(笑)。

そして、大学進学理由は「将来や仕事について考える」「知識や技術を得る」が多く、「皆が行くから」とか「親が薦める」といった消極的な理由は非常に少ないです。サークル活動については、加入していない学生が4割に達し、名大とほぼ同様の結果が得られています。大学が好きかどうかという質問には、「好き」「まあ好き」が83%に達しています。

つまり、大学生が授業をサボらなくなっている傾向は本学に限ったことではなく、全国的な傾向のようです。問題は、これまでの大学ではさまざまな課外活動がある種の人間形成機能を果たしてきたわけですし、最近これにあまり積極的に参加せず、授業だけまじめに出席してまっすぐに帰宅する学生が増えているということについて、われわれ教師がどのように受け止めればよいのかということです。それはつまり、課外活動の代わりとして、授業に人間形成機能がより大きく求められるようになったということなのではないでしょうか。もしそうだとすれば、力めるのかもしれませんが。

名大生の学習履歴

次に名大生の学習履歴についてみてみたいと思います。伝統的に名大の学部入試では文系・理系を問わず、数学と英語の能力が重視されてきました。高校の教科でいえば、数学・数学、英語はほとんどの学生が履修してきており、加えて文科系では論述力、理科系では数学、物理、化学の学力が求められてきました。反面、地学、生物学、現代社会、政治・経済などの履修率は低くなっていました。

文系の数学は無し、理系の英語は無し

ところが、前期・後期入試制度の導入により、名大生の学習履歴にも変化が起きているようです。多くの文系学部では、後期入試で数学が必修ではなくなりました(文、

名大入試の傾向 - 文系の数学はずし

- 多くの文系学部の後期日程で、**数学は必修でなくなった**
 - 文：前期は数学外し可能
後期二次は数学なし
 - 教育：後期二次は数学なし
 - 法：後期は一次も二次も数学なし
 - 情報文化：後期は数学外し可能

出典「平成17年度名古屋大学入学者選抜の実施教科・科目について」

19

大学時代にどのような力を伸ばすことに興味があるか

- 文
 - 社会や文化のしくみを理解する力 (平均+31.1%)
 - 歴史的な文脈に沿って物事を理解する力 (+27.8%)
- 教育
 - 社会や文化のしくみを理解する力 (+28.1%)
 - 外国語を書く力・話す力 (+15.6%)

「名大生の学習ニーズに関するアンケート調査」：カリキュラム改革に関する検討WG報告書「名古屋大学教養教育改革の課題」：名古屋大学共通教育委員会編、2001年3月

23

大学時代にどのような力を伸ばすことに興味があるか

- 法
 - 効果的に伝わる文章を書く力 (平均+29.0%)
 - 文章を読んで理解する力 (+19.3%)
- 経済
 - 必要な情報を収集する力 (+8.3%)
 - 周囲の理解を得ながら物事を決定する力 (+6.4%)
- 情文
 - 必要な情報を収集する力 (+10.7%)
 - 芸術を理解し、鑑賞する力 (+9.2%)

「名大生の学習ニーズに関するアンケート調査」：カリキュラム改革に関する検討WG報告書「名古屋大学教養教育改革の課題」：名古屋大学共通教育委員会編、2001年3月

23

大学時代にどのような力を伸ばすことに興味があるか

- 理
 - 科学を通して事実や現象を理解する力(平均+24.8%)
 - 数学的な知識を応用する力 (+21.8%)
- 医・医
 - 心身を管理・維持する力 (+17.1%)
 - 適切な危機管理を行う力 (+13.4%)
- 医・保健
 - 適切な人間関係を築く力 (+4.0%)
 - 心身を管理・維持する力 (+2.4%)

「名大生の学習ニーズに関するアンケート調査」：カリキュラム改革に関する検討WG報告書「名古屋大学教養教育改革の課題」：名古屋大学共通教育委員会編、2001年3月

23

教育、法、情報文化)。多くの理系学部では、後期日程で英語が必修ではなくなりました(理、医、工、農、情報文化)。後期日程入試の定員枠は前期と比べてはるかに少ないですが、それでも、「名大生は数学・と英語についての基礎学力は備わっている」という前提は、必ずしも通用しなくなっています。文科系学生は数学のレディネス、理科系学生は英語のレディネスにばらつきが生じておく必要があります。

名大生の学習意識 - 所属学部によって大きく異なる

次に名大生の学習に対する意識について学部別に観察したいと思います。2000年9月に全学共通委員会で『名大生の学習ニーズに関するアンケート調査』を実施しており、当時の学部生1~3年生1,234人から回答を得ています。

この中で「大学時代にどのような力を伸ばすことに興味があるか」について尋ねています。そこで、各学部の回答結果を全平均と比較して特に差の大きかったものを抽出しました。すると、学生の所属学部によって大きな違いがあることがわかりました。

文学部と教育学部では、「社会や文化のしくみを理解する力」、法学部では「効果的に伝わる文章を書く力」が平均値よりもかなり高い関心を集めました。一方、経済学部と情報文化学部では「必要な情報を収集する力」に対する関心が最も高かったですが、平均値と比較してそれほど突出しているわけではありませんでした。

理系学部をみると、理学部と農学部では「科学を通して事実や現象を理解する力」、工学部では「数学的な知識を応用する力」に対する関心が強く、医学部医学科では「心身を管理・維持する力」、医学部保健学科では、平均値と比べてそれほど大きくはありませんが、「適切な人間関係を築く力」に対する関心が大きいことがわかりました。

このように、学生の学習志向性は所属学部によって大きく異なることがわかりました。しかし、入学時からすでにそういう特性が出ているのか、入学後の授業や学習

大学時代にどのような力を伸ばすことに興味があるか

工

- 数学的な知識を応用する力 (平均+20.3%)
- 科学を通して事実や現象を理解する力 (+17.5%)

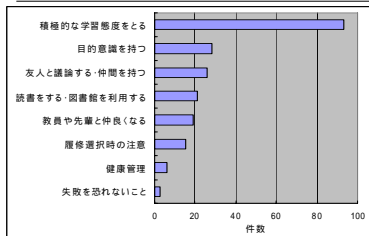
農

- 科学を通して事実や現象を理解する力 (+18.8%)
- 適切な危機管理を行う力 (+7.5%)

『名大生の学習ニーズに関するアンケート調査』、『カリキュラム改革に関する検討WG報告書』名古屋大学教職教育改革の課題。名古屋大学共通教育委員会編。2001年3月

24

先輩から後輩に贈る名大での勉強法



出典：名古屋大学高等教育研究センター編『初年次オリエンテーションを支援するスタディ・ティップスの開発と活用に関する事業』、2005年3月、92-100頁

24

環境の違いによってそうなるのかは、はっきりとわかりません。

名大生は積極的な学習態度をとることが苦手？

私は昨年度後期(2004年)の2年生向けの授業で、「先輩から後輩に贈る名大での勉強法」という課題を課したことがあります。そこで得られた学生の回答をいくつかのカテゴリーにわけてみました。すると、圧倒的に多かったのが「積極的な学習態度をとる」というものでした。次いで、「目的意識を持つ」「友人と議論する・仲間をもつ」「読書をする・図書館を利用する」「教員や先輩と仲良くなる」という順でした。つまり、裏返して言えば、実際に積極的・主体的な学習態度をとることはなかなか難しいということの意味するのではないのでしょうか。目的意識を持ったり、友人と議論したり、読書をするといったことも同様です。

学習活動で特に困ったことについても自由記述で彼らに意見を求めたところ、自分自身に対する動機づけができていないことを挙げる意見が多くみられました。また、将来目標が定まらないことへの不安、高校までとは異なる論理的思考(クリティカル・シンキング)をどうやって身につけたらいいかわからないという悩みが多くみられました。

教室に一人でぼつんと座り、教師の言っていることが理解できず、授業が終われば家に帰ってしまう大学生活は、ともすると受け身で、孤独で、内向的になりがちです。仲間を交わり、読書をし、積極的に教員とコミュニケーションをとり、目的意識を形成していくことの重要性は、学生自身も認識しているようです。しかし、現実にはそれが十分にできていない。こうした点について、特に1年生や2年生の低年次において、大学や教師の側で何らかの組織的対応が必要かもしれません。大学は自ら学ぶところだといって放っておいても、状況は良くならないからです。

学習意識のまとめ

- 所属学部によって学習ニーズに学習志向性に大きな違いがみられる
- 学習志向性の強い学部とそうでない学部がある
- **積極的な学習態度、目標意識、仲間づくり**などの重要性を認識しているが、なかなか実行できていない

25

4. まずはここから始めましょう

- 名大の2年生に「実践しているかどうか」を調査
 - 実践している：2点、少し実践している：1点、実践していない：0点

1. 教員に接する機会を増やす	平均0.37
2. 学生間で協力する機会を増やす	1.21
3. 能動的に学習する	0.71
4. 学んだことをすぐにフィードバックする	0.62
5. 学習に要する時間の大切さを学ぶ	0.93
6. 自分自身に高い期待をする	0.85
7. 多様な才能と学習方法を尊重する	1.23

まずは、学生に接する機会をもう少し増やしてみませんか？

26

名大生の学習意識をまとめると

このように名大生の学習意識をまとめると、所属学特定の学習志向性の強い学部（文、教育、法、理、工など）と弱い学部（医学部保健学科、経済など）に分かれること、名大生は積極的な学習態度を取ることの重要性を認識しているが、実行するのは容易でないこと、などを指摘することができます。

手始めに何からやればよいのか

それでは我々は名大の教師として、何から手をつけ把握するところから始めてみてはいかがでしょうか。実は、今年5月、学部2年生（162人）に対して、先日のランチタイムFDで中井助教授がご紹介した『優れた授業実践のための7つの原則』（Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education, 以下、7つの原則）に示された具体的な実践手法を自分が実践しているかどうかについて尋ねてみました。

実践している：2点、少し実践している：1点、実践していない：0点で原則ごとに平均点を算出したところ、「教員に接する機会を増やす」は0.37と他の原則と比較して著しく低いという結果が得られました。一方で、「多様な才能と学習方法を尊重する」や「学生間で協力する機会を増やす」はともに1.2を上回っています。「教員に接する機会を増やす」が著しく低かったということは、そこに示された実践手法が名大生の日常の学習風景からはほど遠いものだったということです。名古屋大学としても、一人一人の教師としても、何らかの対応が求められているように思います。

学生に接する機会を増やす手法

「教員に接する機会を増やす」ためには、どのような実践手法が考えられるのでしょうか。実際にアメリカの大学で試みられた実践手法から抜粋してみました。たとえば、学生が研究室に立ち寄ることをすすめる、自分の過去の経験や考え方などを学生に話す、その分野の就職情報やキャリア形成などのアドバイスを、授業開始

学生に接する機会を増やすノウハウ

(アメリカの大学の実践手法より抜粋)

- 学生が研究室に立ち寄ることをすすめる
- 自分の過去の経験や考え方を学生に話す
- その分野の就職情報やキャリア形成などのアドバイスを
- 授業開始2週目までに学生の名前をおぼえる
- 授業が終わった後に、すぐ帰らない
- 学生にとって便利なオフィスアワーを設ける
- 学生に自己紹介させる
- ユーモアをはさむ
- 教室間を学生と一緒に歩く
- 学生の課題に対して、個別のフィードバックを与える
- 授業内容について、学生からフィードバックをとる
- 自分の研究内容について話す

出典：中井俊樹・中島英博「優れた授業実践のための7つの原則とその実践手法」『名古屋高等
教育研究』第5号、2005年3月、283-299頁

28

2週目までに学生の名前をおぼえる、授業が終わった後すぐ帰らない、学生にとって便利なオフィスアワーを設ける、学生に自己紹介させる、ユーモアをはさむ、教室間を学生と一緒に歩く、学生の課題に対して個別のフィードバックを与える、授業内容について学生からフィードバックをとる、自分の研究内容について話す、などです。

これらの中には、すぐにできるもの（教室間を学生と一緒に歩く、自分の過去の経験や考え方を学生に話す）がいくつか含まれています。まずは、教師の側からあの手この手で学生に積極的に働きかけてみてはどうでしょうか。

本日のまとめ

本日の話をまとめると、平均的にみると名大生はおしなべて真面目だが、知的刺激に乏しい学習生活を送識、仲間づくりなどを重要だと考えているが、なかなか実行できていない、こうした状況は放っておいてもなかなか改善されないので、教師の側から積極的に学生に働きかけてみてはどうか、ということです。今日の話が、今後授業をされる上でお役に立てば幸いです。

本日のまとめ

- 名大生はおしなべて真面目だが、知的刺激に乏しい生活を送っているようだ
- 名大生は積極的な学習態度、目標意識、仲間づくりなどを重要だと考えているが、なかなか実行できていない
- 学生に接する機会を増やすような工夫を始めてみませんか？

29

質疑応答

質問者

今日の話は「学生は何を求めているか」というタイトルですが、結局、学生は何を求めているのでしょうか。

近田

タイトルですから、それが最も重要なことです（笑）。私なりの答としては、最後に申し上げたこと、まずは「教師に接する機会を増やす」ことから始めてはどうかと思います。今回の学生調査だけでなく、別の科研による教員に対する調査結果でも、「教員が学生による授業評価結果を参考にして授業改善に努める」「教員が学生をほめるように努力する」などの点で、名古屋大学は他の旧帝大

よりもひとときわ低いという結果が得られました。その理由はよくわかりません。本当にどうしてなのでしょうね。みなさんはいかがお考えですか。まずは、教師の側から学生に接するきっかけを増やしてみたらどうでしょうか。

質問者

私は外国人教師として感じていることを申し上げたい。たしかに名大生はまじめに授業に出席しているかもしれない。しかし、私自身の体験から居眠りをしている学生が多いように感じられます。まじめに出席することと、まじめに授業に取り組むことは違います。このことについてはどう思われますか。日本では当たり前のことなのでしょう。私の国では絶対に許されないことです。

別の参加者

昔はこのランクの大学には、そういうことを注意しなくてもよい学生しか入学できなかったのです。しかし、現在はそうではなくなりつつある。だから、今の名大の教師はどのように対応しているのかわからないというのが本音でしょうね。本来居眠りは許されることはありません。

質問者

先生が一方的に話し続けるから学生が寝てしまうのであって、ときどき質問したりすれば安心して寝ることはできないと思いますが。

近田

寝ても大丈夫だという授業と、寝てはいけない授業があるということですね。つまり、教師の側で学生を寝かさなような工夫が必要だということになりましょうか。

別の参加者

しかし、起こすために学生を当てるというのは、本末転倒かもしれません。

質問者

受講する際に参考にした授業概要に書かれた内容と、実際に行われた授業の内容が大幅に異なっているということがあるようですが、これが学習意欲を減退させる要因になっていませんか。

別の参加者

そうですね。「ゴーイングシラバス」を利用して、授業計画をちゃんと書き込むようにすればある程度改善されるようになると思います。まずはシラバスを充実させることではないでしょうか。

5 アンケート集計と総括

青山 佳代

近田 政博

1. はじめに

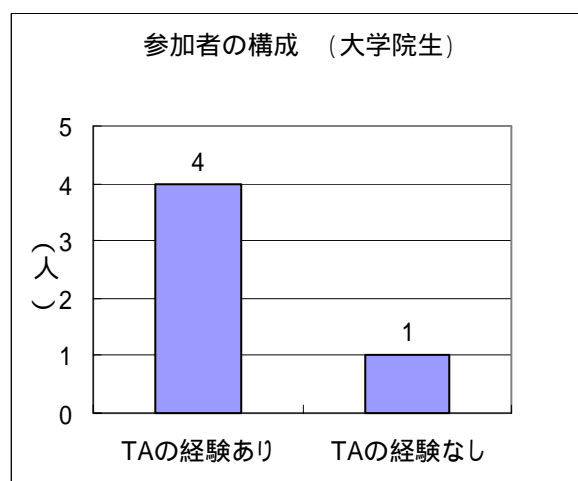
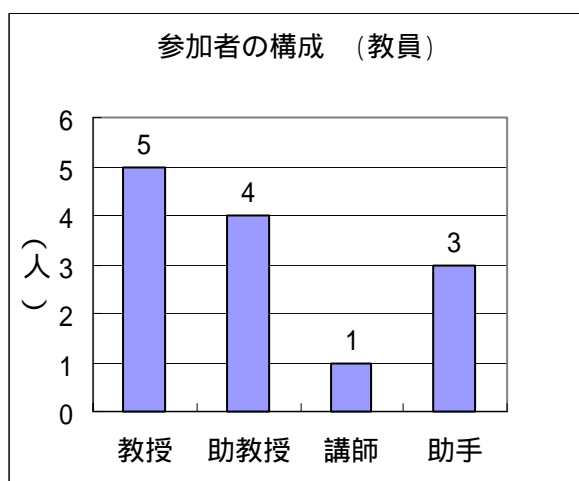
今回のランチタイムFDは、高等教育研究センターで企画した、新たなFDプログラムであった。そこで、今後より充実したプログラムを提供していくために、参加者の協力を基にアンケートを、ランチタイムFDの最終日に実施した(最終日に出席できない人に対しては、3日目に実施)。以下にアンケートの集計結果を提示する。

加えて、高等教育研究センタースタッフ間で実施した反省会(「ランチタイムFD反省会」)で出された意見も織り交ぜながら、今後の課題も提示する。

2. 集計結果

2.1 参加者の概要

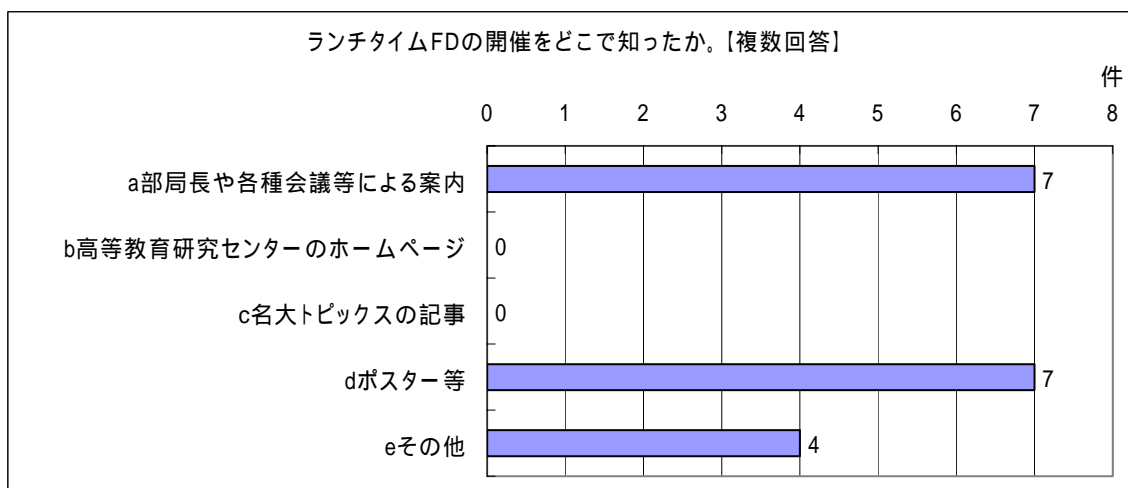
アンケート回答依頼の結果、依頼した人すべて(教員 13 名、大学院生 5 名)から回答を得た。回答者の構成は以下のとおりである。新任教員や若手教員を歓迎することを明記した一方で、実際の参加者は教授層も少なくなく、若手からベテランまで幅広い参加者を得ることができた。



2.2 ランチタイムFDの広報について

ランチタイムFDの開催をどこで知ったかについては、「部局長や各種会議等による案内」および「ポスター等」で知ったとの意見がもっとも多かった。このことは、高等教育研究センターのスタッフが各部局長に対して、ランチタイムFDの開催を呼びかけたことの効果の表れとみていいだろう。一方、『名大トピックス』や高等教育研究センターのホームページでの案内による参加は0件であった。

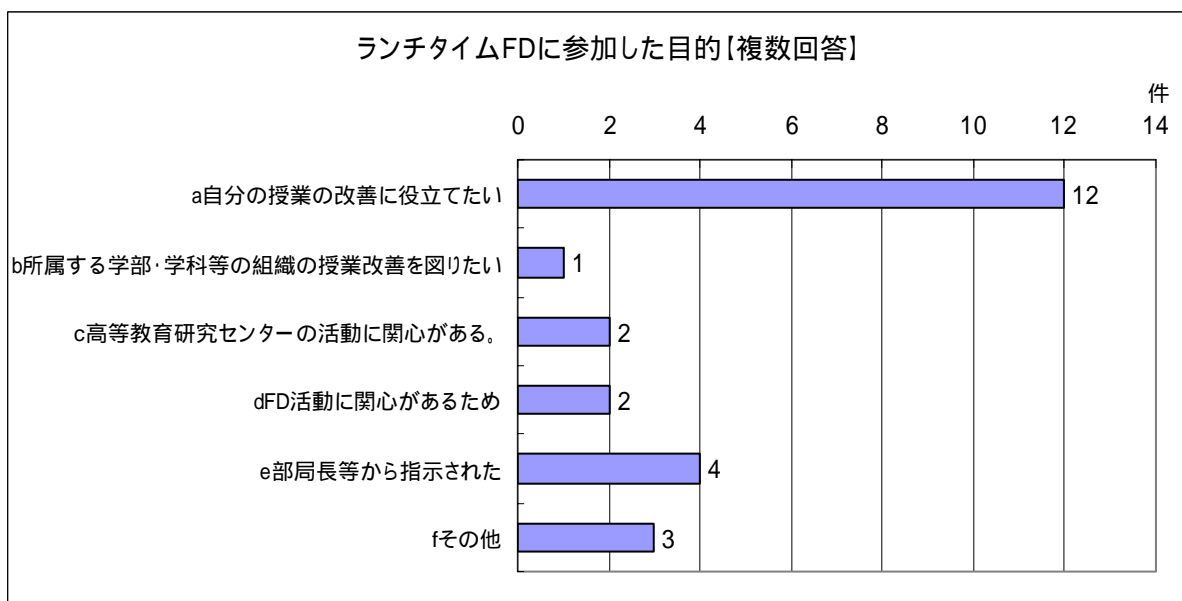
その他は、高等教育研究センターのスタッフによる個人的な誘い、大学院生の場合は、指導教員や友人から知らせてもらったという意見もみられた。



2.3 ランチタイムFDに参加した目的について

ランチタイムFDに参加した目的については、本来の趣旨である「自分の授業の改善に役立てたい」というものが最も多くの回答を得た。

一方で、部局長等から指示されたというものも4件あった。

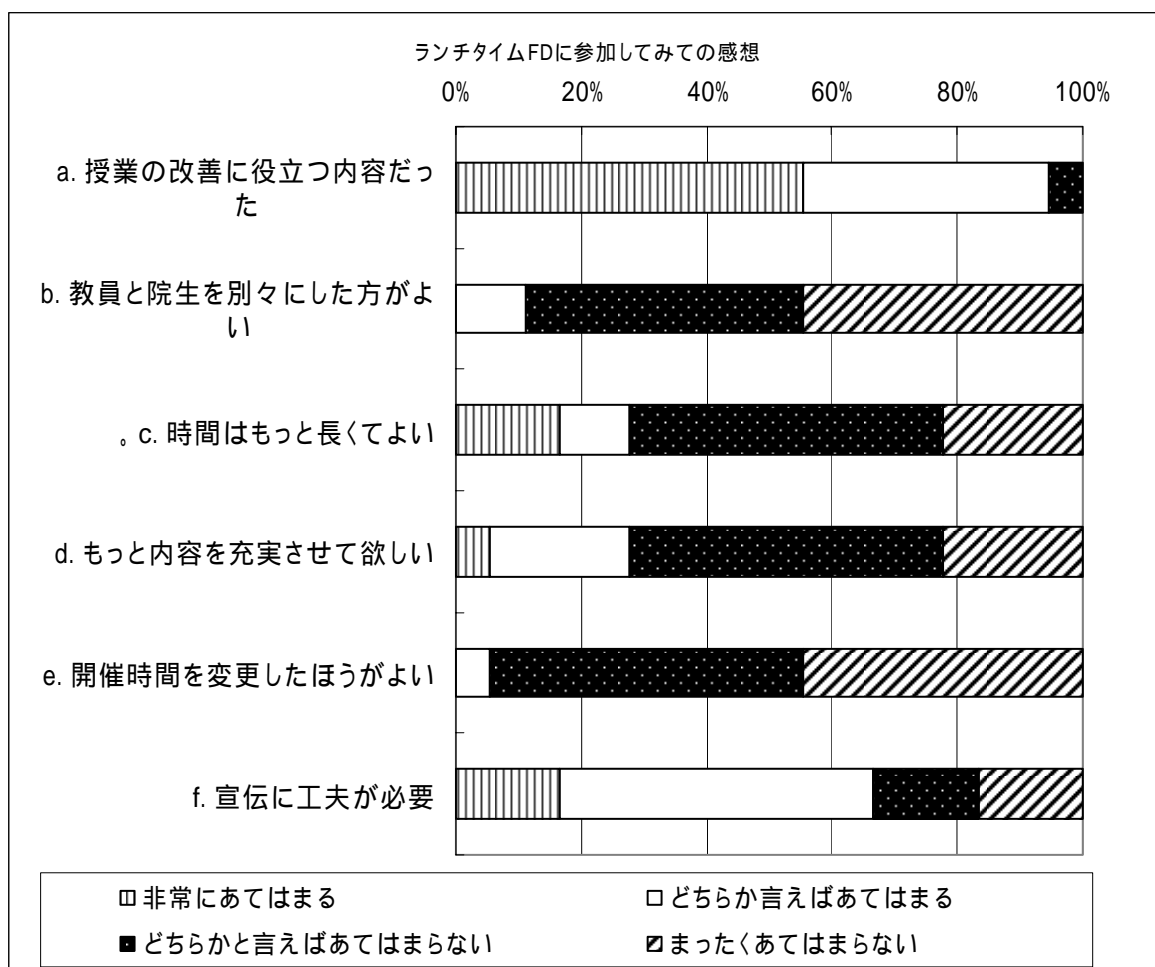


その他の意見としては、

- ・ 学内での学生を取り巻く環境について知りたかった（教員 / 助手）
- ・ 将来のため、これまでの振り返り（大学院生）
- ・ 大学教授職に興味がある（大学院生）
- ・ 他のロースクールに勤めている同僚に内容を伝えてあげたい（教員 / 教授）
などが挙げられた。

2.4 ランチタイムFDに参加した感想

この場合の本日というのは、正確にはランチタイムFDの第4日目のことであるが、ランチタイムFD全般に対しての感想として尋ねた。これによると、半数以上の参加者が、「授業の改善に役立つ内容だった」かについて、「非常にあてはまる」と回答している。



ランチタイムFDの対象を、「教員と院生を別々にした方がよい」かについては、8割以上の参加者が「どちらかと言えばあてはまらない」もしくは「まったくあてはまらない」に回答しており、教員と院生の混合でもあまり気にしていないようである。

時間の長さについては、7割がこの時間の長さでよい、残り3割がもっと長くてよい、と回答し

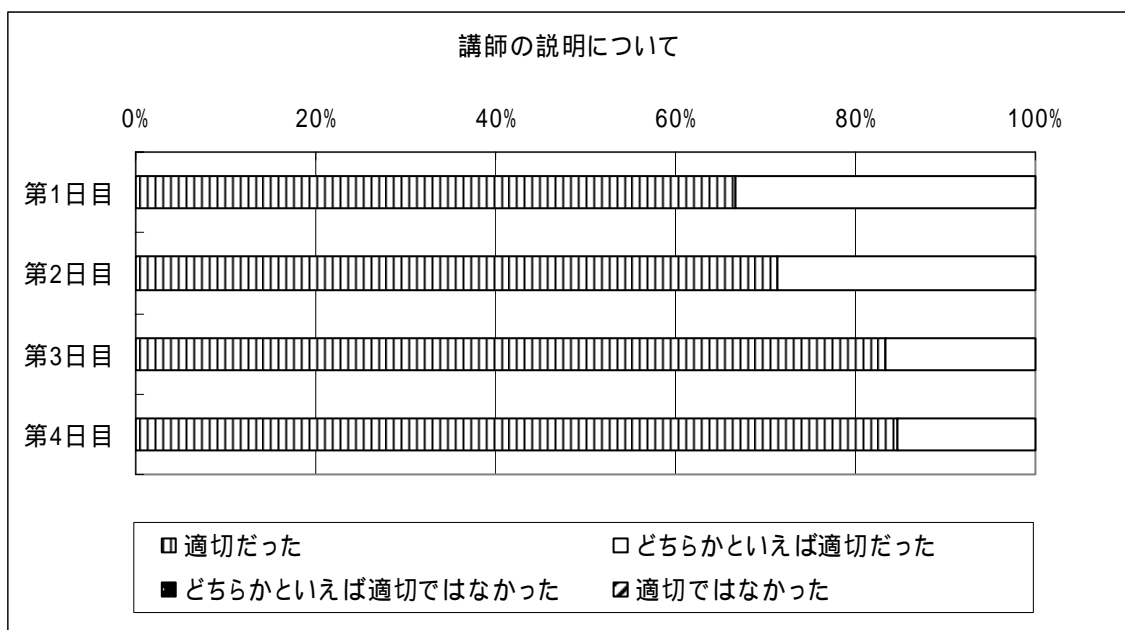
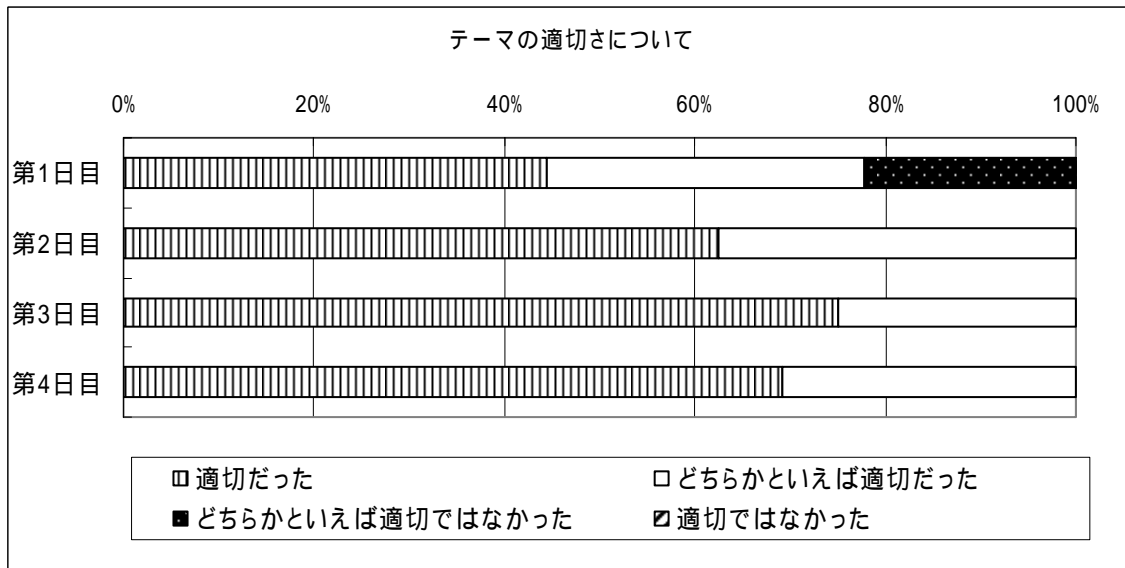
ている。

内容の充実度に関しては、7割の参加者がこのままでもよいと感じている。開催時間については、9割以上の参加者から昼休み(ランチタイム)の時間帯に関して肯定的な意見を得た。

最後に宣伝方法については、7割近くの参加者から「工夫が必要」との意見があり、今後、広報の方法について検討していく必要があることが明らかとなった。

2.5 テーマの適切さと講師の説明について

各回のテーマの適切さについては、第1日目については、「どちらかといえば適切ではなかった」という意見を2割ほどであった。第1日目のテーマは、2日目以降の内容と比較して概論的・総論的な内容であったことから、このような意見が出たと思われる。講師の説明については、すべての日程において、肯定的な意見を得ることができた。



2.6 自由記述について

以下に、「今回のランチタイムFD」に関する自由記述意見を示す。

- ・ 今回のものを基礎編とし、さらに発展編を作ってもらって、次回は発展編に参加してみたい。(教員/教授)
- ・ 気楽に参加できて良かったです。短い時間なので限界はあるかと思いますが、具体例をより盛り込んだほうがさらにわかりやすくなると思います。(教員/助教授)
- ・ とてもよかったです。(大学院生)
- ・ ティップス先生のホームページを拝見させていただいて、かなり期待してきました。はじめの期待は、聴くだけで、改善が期待できる知識を得る、ということでしたが、その点については、満足できなかったです。(だいたいにおいては、文献をみる、という感じなのが多いように感じました。)でも、時間の制限もあるし、仕方ないことだとも思っています。(教員/助教授)
- ・ これからもこのようなFDを開いて欲しいです。(大学院生)
- ・ このような機会を学内でさらに増やして欲しいです。(教員/助手)
- ・ いろいろな面で充実していてよかった。これからも期待しています。(教員/助手)

2.7 次回への示唆

本節のしめくりとして、本項では、アンケートの分析結果ならびに同アンケート結果を基にして開催した反省会での意見を反映して、今後のランチタイムFD運営への示唆を記しておきたい。

まず、参加者から一定の評価を得ることができたことをみる限り、今回のランチタイムFDは一応の成功であったとみてよいだろう。同時に、今後改善すべき点もいくつか明らかになった。たとえば、(1)広報戦略、(2)名大教員のニーズの把握、などを挙げることができる。

広報については、今回は、センタースタッフが各部局長に直接呼びかけをしたことが参加者の獲得につながったといえる。しかし、全学で約1,800人に達する名古屋大学の教員のうち、4日間でのべ50人という参加者(大学院生も含めて)は、全体の3%にも達していない。現時点では、おそらく大多数の教員にはまだランチタイムFDについての情報は詳しく伝わっていないと思われる。この裾野をいかに拡大して、教育文化を大事にする「クリティカル・マス」を形成していくかが問われている。同時に、このFDの参加者が大幅に拡大した場合、双方向コミュニケーションを土台とする研修スタイルを大人数においていかに継続しうるのか、という問題が生じてくると思われる。この点についても、あらかじめ検討しておく必要があるだろう。

名古屋大学教員のニーズについては、本格的な調査をまだ行っていない。典型的な研究大学である名大において、教員が授業に対してどのような問題・悩みを抱えているのか、できるだけ早期に把握する必要があるだろう。

高等教育研究センターとしては、同プログラムの参加を通じて、専門領域の異なる教員どうしが知り合うきっかけとなり、教員による授業コミュニティが形成されることを期待している。この本来の趣旨を踏まえつつ、名古屋大学教員のニーズに即した「草の根的な」かつ「自発的な」研修活動を展開していくことが求められている。

資料1 ランチタイムFDで使用したスライド

4日間にわたるランチタイムFDで使用したスライドを掲載する。これらは各回の担当者が作成し、スタッフ全員による事前リハーサルで内容チェックを行った。

第1日目「なぜ授業改善が求められているのか？」

第2日目「学生がより学ぶための授業の方法」

第3日目「学生の学習を支援するシラバスを作ろう」

第4日目「学生は何を求めているか？」

資料2 ランチタイムFDの広報

以下に示すのが、ランチタイムFDの宣伝ポスターである。当センターのスタッフが名古屋大学の13部局の長（学部長ならびに研究科長）に面会を申し入れ、ランチタイムFDの趣旨を伝えるとともに、ポスターを手渡し、各教員の参加をお願いした。

Center for the Studies of Higher Education,
Nagoya University

名古屋大学高等教育研究センター 第1回ランチタイムFD

あなたの授業改善を サポートします (40分、全4日)

5月10日(火) なぜ授業改善が求められているのか？
5月11日(水) 学生がより学ぶための授業の方法
5月12日(木) 学生の学習を支援するシラバスをつくろう
5月13日(金) 学生は何を求めているか？

日時: 2005年5月10日(火)
~13日(金)
12時10分~50分

場所: 名古屋大学
東山キャンパス
文系総合館5階
高等教育研究
センター会議室

お問い合わせ: 中島
staff@csh.nagoya-u.ac.jp
052-789-5384

高等教育研究センターがあなたの授業改善をサポートします。名古屋大学での教育経験の少ない新任教員はもちろん、最近の学生の対応に悩んでいるベテラン教員も歓迎いたします。

また、将来大学教員職をめざす大学院生も歓迎します。あなたの授業改善を4つのテーマからサポートします。

関心のある回だけの参加、4回通しての参加のどちらも歓迎します。

忙しい方は昼食の持ち込みも可能ですので、気楽にご参加ください。コーヒー・紅茶をご用意します。

対象: 名古屋大学の教職員、大学院生

準備の都合上、出席される方は5月6日(金)までに左記問い合わせ先までご連絡下さい。

名古屋大学教職員向けの広報誌である『名大トピックス』にも、ランチタイムFDの報告が掲載された。

高等教育研究センターがランチタイムFDを開催

高等教育研究センターは、5月10日（火）から13日（金）までの4日間、第1回ランチタイムFD*を開催しました。

このFDは、本学での教育経験が少ない若手教員、最近の学生の対応に困っているベテラン教員及び非常勤で授業を受け持つ機会のある大学院学生を対象に、ランチタイムの短い時間（12時10分からの40分間）を活用して授業改善のコツとノウハウを効果的に提供・共有することを目的として実施されたものです。また、コーヒーやスナックを用意し、昼食の持ち込みも可能とし、サロンの雰囲気の中で授業改善に有益な情報提供と自由な意見交換を目指しています。

今回は、10日「なぜ授業改善が求められているのか」（夏目達也同センター教授）、11日「学生がより学ぶための授業の方法」（中井俊樹同センター助教授）、12日「学生の学習を支援するシラバスをつくろう」（中島英博同センター助手）、13日「学生は何を求めているか？」（近田政博同センター助教授）の4つのテーマで行われ、4つのテーマ通しての参加だけでなく、関心のあるテーマだけの参加も可能となりました。様々な部局から教員、大学院学生延べ50名の参加があり、授業改善のコツやノウハウをつかめたと好

評でした。

なお、高等教育研究センターでは、今回のFDが好評だったことから、今秋に再度の開催を検討しています。

*FDとは、ファカルティ・ディベロプメントの略で、日本の大学では教育改善のための組織的取り組みを指す言葉として用いられています。



サンドイッチをつまみながらの研修風景（5月13日）

資料3 ランチタイムFD参加者へのアンケート用紙

本日のランチタイムFDはいかがでしたか。今後この企画を充実させるために、参加者の皆様のご意見をお聞かせください。

1. あなたのお立場は次のどれですか。

- a. 教員 (1. 教授 2. 助教授 3. 助手)
- b. 大学院生 (1. TA経験あり 2. TA経験なし)

2. 今回のランチタイムFDをどのようにして知りましたか。あてはまるものすべてにつけてください。

- a. 部局長や各種会議等による案内
- b. 高等教育研究センターのホームページ
- c. 名大トピックスの記事
- d. ポスター等
- e. その他 ()

3. 今回のランチタイムFDに参加された目的は何ですか。あてはまるものすべてにつけてください。

- a. 自分の授業の改善に役立てたい。
- b. 所属する部局・学科等の組織の授業改善を図りたい。
- c. 高等教育研究センターの活動に関心がある。
- d. FD活動に関心があるため。
- e. 部局長等から指示された。
- f. その他 ()

4. 本日の話をどのように感じましたか。以下の1～4のうち当てはまるものにつけてください。

- 1. 非常にあてはまる
- 2. どちらかと言えばあてはまる
- 3. どちらかと言えばあてはまらない
- 4. まったくあてはまらない

- a. 授業の改善に役立つ内容だった。 1 2 3 4
- b. 教員と院生を別々にした方がよい。 1 2 3 4
- c. 時間はもっと長くてもよい。 1 2 3 4
- d. もっと内容を充実させてほしい。 1 2 3 4
- e. 開催時間を変更した方がよい(例:) 1 2 3 4
- f. 宣伝に工夫が必要(例:) 1 2 3 4

資料4 「ランチタイムFD」の様子(写真)



ランチタイムFDで配布した資料



ランチタイムFDの会場
(高等教育研究センター会議室)



紅茶・コーヒーの提供



司会・進行役の戸田山和久センター長



1日目（夏目達也教授）



2日目（中井俊樹助教授）



3 日目（中島英博助手）



4 日目（近田政博助教授）

特色 GP シリーズ2

「第1回ランチタイムFD」の実践記録

2005年9月15日発行

発行 名古屋大学高等教育研究センター
〒464-8601 名古屋市千種区不老町1
TEL 052-789-5696
FAX 052-789-5695
E-mail staff@csh.nagoya-u.ac.jp
印刷・製本 アインズ株式会社
